

『花供養』Webサイト開始・櫻井コレクションWeb公開記念展覧会図録

花供養と京都の芭蕉

文部科学省グローバルCOEプログラム(立命館大学)「日本文化デジタルヒューマニティーズ」拠点

立命館大学 アート・リサーチセンター



立命館創始一四〇年・学園創立一二〇周年記念

『花供養』Webサイト開始・櫻井コレクションWeb公開記念展覧会

花供養と“京都の芭蕉”

二〇二〇年二月一日(月)～二月二十六日(金)
立命館大学アート・リサーチセンター二階展示室

「シンポジウム」 二月二〇日(土) 於同センター多目的ルーム

「特別公開」 東山芭蕉堂 二月九日(金)・二一日(日)

目次

口絵Ⅰ 森川許六刀芭蕉木像・箱書／五仲庵澤有節所持芭蕉木像・笈扉書	3
口絵Ⅱ 展示『花供養』一覧	4
ごあいさつ 赤間 亮	7
資料解説	8
京都の芭蕉庵（金福寺）・芭蕉堂（東山）・芭蕉塚の分布地図	10
京都の芭蕉塚	12
芭蕉堂の変遷	16
『花供養』俳人分布図	22
Ⅰ 寛政六年關吏主催	
Ⅱ 文化三年蒼虬主催	
Ⅲ 弘化三年九起主催	
Ⅳ 安政五年公成主催	
改訂『花供養』書誌 京都俳諧研究会	28
展示一覧	38
協力者	40

凡例

- ◎ 本冊子は、二〇一〇年十一月一日（月）から十一月二十六日（金）まで、立命館大学アート・リサーチセンターで開催する展覧会「花供養と“京都の芭蕉”」の資料解説である。
- ◎ 資料解説番号と展示番号とは、同じである。
- ◎ 『花供養』に付した番号・記号・略称等は、本冊子掲載の33頁「改訂『花供養』書誌」の凡例に同じである。
- ◎ 所蔵者は略称を用いた。正式名称は、次の通りである。
- ◎ 関西大学・関西大学図書館
- ◎ 糸井文庫・舞鶴市郷土資料館糸井文庫
- ◎ 櫻井文庫・立命館大学アート・リサーチセンター櫻井文庫
- ◎ 西園寺文庫・立命館大学図書館西園寺文庫
- ◎ 翻刻に際しては、適宜句読点・濁点を付し、おおむね漢字は常用漢字体に改めた。
- ◎ 櫻井文庫、糸井文庫、『花供養』翻刻資料（画像付翻刻を含む）は、立命館大学アート・リサーチセンターのWebシステムから閲覧できる。
- ◎ 役割分担は次のとおりである。

編集・資料解説

聖トマス大学准教授 竹内千代子
 大阪城南女子短期大学大学教授 小林 孔
 元福井大学教授 松本節子
 立命館大学大学院博士課程 岸本悠子
 立命館大学文学部教授 赤間 亮

企画・デジタルアーカイビング

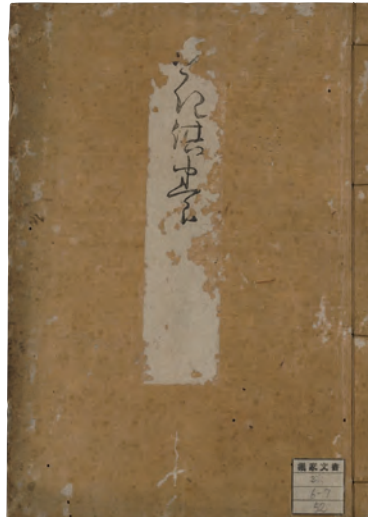
表紙題字 小林陽子
 裏表紙 『芭蕉堂三代発句集』（櫻井文庫）
 『周陽三家発句集』（山口県立山口図書館蔵）



I 森川許六刀芭蕉木像・箱書（上）／五仲庵澤有節所持芭蕉木像・笈扉書（下）



寛政九年 関更編 個人蔵 [Web](#)



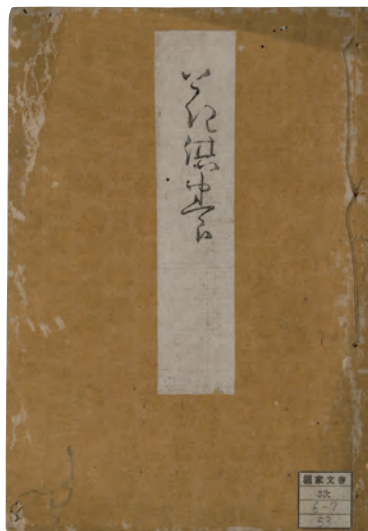
寛政四年 関更編 堀家文書 [Web](#)



天明六年 関更編 糸井文庫 [Web](#)



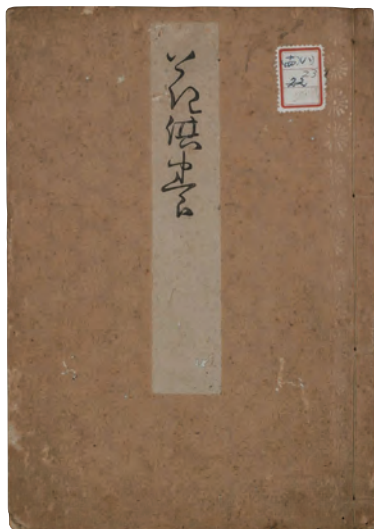
享和元年 蒼虬編 櫻井文庫 [Web](#)



寛政六年① 関更編 堀家文書 [Web](#)



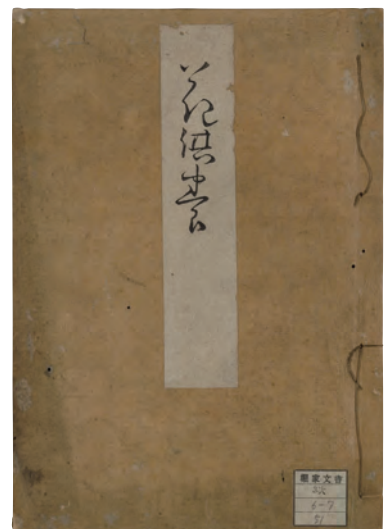
寛政元年 関更編 櫻井文庫 [Web](#)



文化三年 蒼虬編 糸井文庫 [Web](#)



寛政六年② 関更編 個人蔵



寛政三年 関更編 堀家文書 [Web](#)

Ⅱ 展示『花供養』一覧



弘化三年 九起編 個人蔵



天保十二年 九起編 櫻井文庫 [Web](#)



文化八年・文化九年 蒼虬編 糸井文庫 [Web](#)



弘化四年 九起編 個人蔵



天保十三年 九起編 糸井文庫 [Web](#)



天保三年 千崖編 糸井文庫 [Web](#)



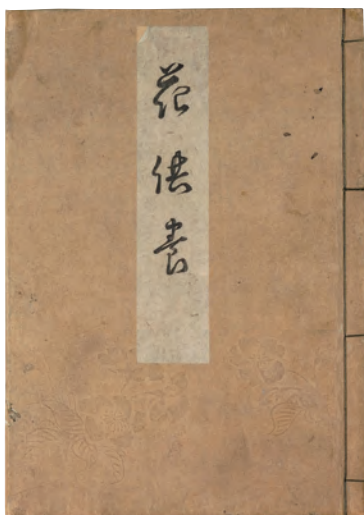
安政元年 公成編 櫻井文庫 [Web](#)



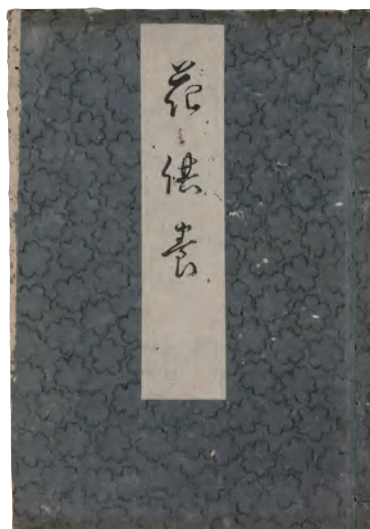
弘化二年 九起編 櫻井文庫 [Web](#)



天保四年 蒼虬編 糸井文庫 [Web](#)



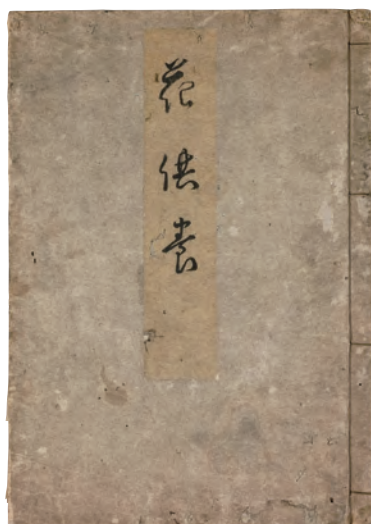
慶応元年 公成編 櫻井文庫 [Web](#)



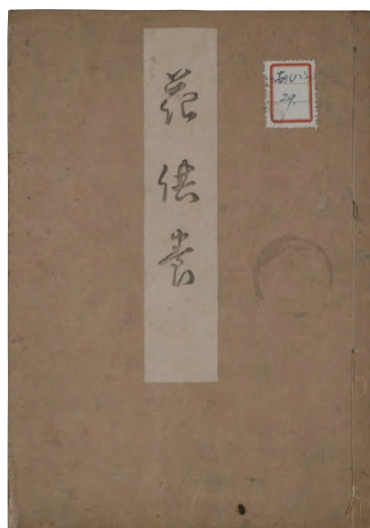
文久二年 公成編 櫻井文庫 [Web](#)



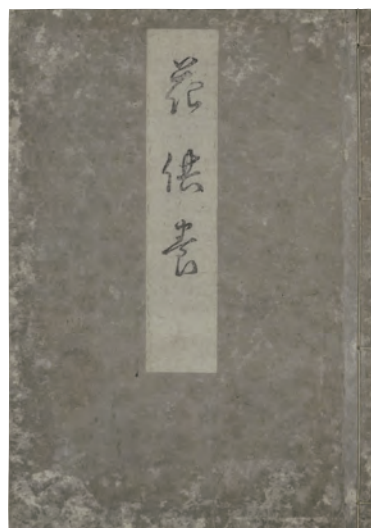
安政三年 公成編 櫻井文庫 [Web](#)



慶応三年 公成編 櫻井文庫 [Web](#)



文久三年 公成編 糸井文庫 [Web](#)



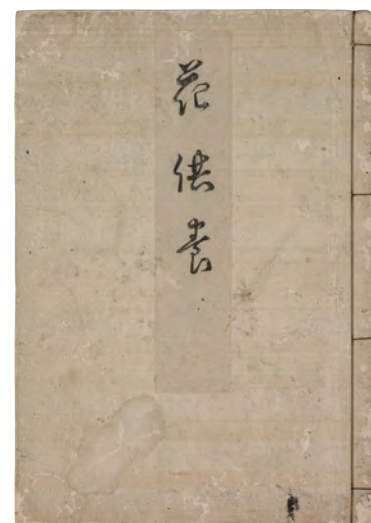
安政五年 公成編 個人蔵



明治二年興行・明治三年序 良大編
櫻井文庫 [Web](#)



元治元年 公成編 個人蔵



万延元年 公成編 櫻井文庫 [Web](#)

いあさひ

京都俳諧研究会は、アート・リサーチセンターで活動をしている。そのルーツを遡ると二〇〇二年の舞鶴市郷土資料館が所蔵する糸井文庫を対象とした受託研究に端を発している。糸井文庫は、丹後の伝説に関係する浮世絵や文学作品に特徴があるが、もう一つ丹後地方を中心とした俳諧資料が豊富である。その中に『花供養』が七冊あり、天明六年（一七八六）の第一冊目を持っている。『花供養』は京都東山の芭蕉堂が明治初年の長きに亘って出版した全国組織の芭蕉顕彰事業である。それ以来、「京都の芭蕉」は研究会の一つのテーマとなり、活動が続けてきた。

こうしたなか、光栄にも俳諧研究に大きな足跡を残された故櫻井武次郎先生の御蔵書をアート・リサーチセンターがお引き受けることになった。櫻井先生は、『花供養』の意義に逸早くお気づきになった先学のお一人であった。

立命館大学には、既に近世和歌資料の西園寺文庫、近代短歌資料の白楊荘文庫と韻文系の研究資源が豊富にある。ここに近世俳諧資料が加われば、立命館の日本文学研究にとって一つの柱になることは間違いない。

櫻井コレクションは、全冊全丁のWeb公開を目指して、現在急ピッチで作業が進んでいる。本展覧会中には、『花供養』の翻刻サイトがオープンする。

アート・リサーチセンターでは、情報公開と研究資源の共有化を進め、京都文化研究の一拠点になることを目指している。俳諧研究の分野においても、このような研究成果を世に問えることを慶びたい。

本展覧会を開催するにあたり、資料の借用や資料調査を許可された諸機関、諸氏に深甚の謝意を申し上げると共に、研究会のメンバーならびに関係諸氏に御礼を申し上げ、日頃のご努力に報いたい。

平成二十二年時雨月

立命館大学アート・リサーチセンター長 赤間亮

資料解説

1 双林寺境内芭蕉堂関係文書

関西大学蔵

天明期と明治期の文書をそれぞれ二つずつ収めた合装卷子。文書の構成は、

①天明三年一〇月付 双林寺塔頭林阿弥妙長他四名連署 四夢庵關更宛一札

(開山香花料の寄附と年貢についての一札。これに土地の絵図を添付。)

②天明七年五月付双林寺西阿弥・林阿弥連署 關更宛南無庵撰待所絵入一札

③明治六年五月並びに一〇月付 芭蕉堂七世内海良大 戸長・区長宛居住届

④明治八年一〇月二八日付 内海良大 木村正幹宛草庵讓渡の一札

であり、創建時と讓渡時との文書を対照的に配している。とくに①と②には、建立についての経緯と南無庵の図面が記されており、芭蕉堂の研究には逸することのできない貴重な資料である。

2 千載堂丈士編『こまざらえ』

糸井文庫

横本(縦 一四・五糎、横 二一・〇糎)一冊。内題「俳諧こまざらえ」。序文「寛政七年九月十日 雄飛」。自跋。丁数 七七丁。成立 寛政七年(序文による)。序文によれば、千載堂の先代堂主であった丈石(天明四年没)が集めて「こまざらえ」と名づけていたものを発刊するという。こまざらえは、木の葉搔きの意味で、「庭のをしへをよくまもり箒目の跡をたがへずして道に恥るの心ざし浅からぬこそ」といい、貞門俳諧の教えを示す。当本は、句合せの高点集で、点印が付されている。「△都良香、●在羽林、○宇治山、□宇治山以上」の四種類である。貞門俳諧での秀吟の判断が分かる句集である。

千載堂は、松永貞徳を鼻祖とし、京都の貞門俳諧を能くした。丈士は、丈石の後を継承したが、「非点者」(『俳諧家譜後拾遺』)という。

3 西村定雅「山にみちて」短冊

個人蔵

「山にみちて野に落来るや夕霞 定雅」

延享元(一七四四)年生、文政九(一八二六)年没、八三歳。俳仙堂、椿花亭などの号をもち、狂歌・洒落本作家としても著名。家業はみすや針の卸商であった。蕪村門の京俳人高井几童・百池・月居と親しい。關更とも親しいが、京都俳壇

に独自の位置をしめる。絵入りの俳書に特徴が見られる。口伝によれば、芭蕉堂四世朝陽の父とも言われる。朝陽は俳仙堂を継承している。墓は、木屋町二条東入ル、善導寺。

4 寺村百池「西と見えて」短冊

個人蔵

「西と見えて日は入にけり春の海 百池」

百池は寛延二(一七四九)年生、天保六(一八三五)年二月一七日没。寺村氏、堺屋三右衛門。茶の湯にも通じた趣味人で煙管商と糸物商とを兼業した。蕪村の門人で、後援者としても知られている。寛政期に『花供養』の常連として名をあらわすが、芭蕉堂關更とは二条家での俳席をとおして交流を深めたものであろう。

5 柏原瓦全編『さくら会』

個人蔵

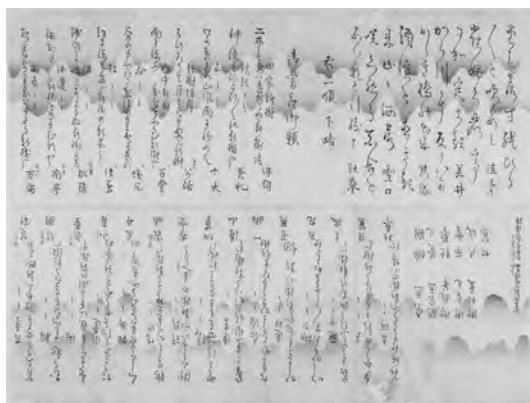
文化四(一八〇七)年・八年版ともに半紙本一冊。表紙に桜の型押模様がある。京都橘屋治兵衛刊。『さくら会』には、文化四年から一〇年の版本が知られる。三月に芭蕉追福の俳諧興行を修し、諸氏から花の句を求めて書冊と成したものの。瓦全は、延享元(一七四四)年生れ、文政八(一八二五)年没、八二歳。五升庵蝶夢没後に五升庵を継承し、師蝶夢の顕彰につとめる。文化八年版は蝶夢一七回忌追善集である。京都阿弥陀寺(現、上京区)に蝶夢の句碑を建立した。

6 二条家俳諧摺物

個人蔵

二条家主催の俳諧興行は、寛政二(一七九〇)年九月五日を初会とし、中断、再開を繰り返すが、明治二四年まで行われた。二条家の銅駝御殿で興行された。この俳席では、当代の有力俳人が、二条家宗匠に任ぜられた。本点は、文政九(一八二六)年四月二五日の俳席を伝えた二枚一具の懷紙仕立ての摺物。この日の脇宗匠は、芭蕉堂蒼虬がつとめ、知事は、其成・其篤父子で、蕉門書林菊舎太兵衛のことである。ちなみに、文政九年の『花供養』は、現在その所在が確認されない。また、その前後の文化一四(一八一七)年から文政一〇(一八二七)年までは、『花供養』刊行の空白期であり、本点は芭蕉堂主蒼虬の俳諧活動

を考察する資料としても重要である。



7

京都の芭蕉庵（金福寺）・芭蕉堂（東山）・芭蕉塚（芭蕉句碑）の分布地図

京都市中における芭蕉顕彰事業の展開を地図に示した。10・11頁参照。東山の芭蕉堂は、京都の芭蕉顕彰事業の最も大きな拠点のひとつで、大津義仲寺にある翁堂をしのぐ存在となった。近世期のもものは白ヌキ1・18、近現代のものは19・36。近世期は、市中の北側と東山に多く、寺社内に建立、芭蕉塚（墳）の意識が強い。ただ、寺社は名所でもあった。近現代のものは、塚の意識が希薄になり、芭蕉顕彰の句碑の意識が強くなっている。宇治や嵯峨などの観光地に建てられることが多く、寺院に限らないのは、記念碑の意識が強くなったためであろう。分布地図には、天保二年文叢堂版地図を用いた。12・13頁には「京都の芭蕉塚」を一覧表にまとめた。

8

畑吟風宛富原支雪書簡

畑家文書

正月二六日付、吟風宛支雪書簡。縦一六・五糎、横一〇五・八糎。吟風・支雪はともに淀藩士。吟風は、天明七（一七八七）年七月二六日生、安政六（一八五九）年一二月一三日没、二五〇石取。支雪は、独自の点印を持ち、淀藩士の連句興行

に点を付けたものが残る。

淀藩士による俳諧は盛んで、藩内の活動に加えて、東山の俳仙堂や芭蕉堂の俳諧に交わったことが知られる。芭蕉を敬慕し、本簡には、

華墨拝見仕候。如仰余寒退兼候得共、弥御安泰被成御座奉恐寿候。

然ば、先年御宿被下候蕉翁象、今日御返し被下、慥に御預申候。不計最早三年に相成申候。永々逗留にて御世話と奉存候。滞留中、

赤句短冊をも為御見被下、寛々拝見仕候上返上可申上候。（云々）

と、淀藩にあったという芭蕉像や芭蕉短冊の記載がある。武士にも広がる芭蕉顕彰運動として注目される。

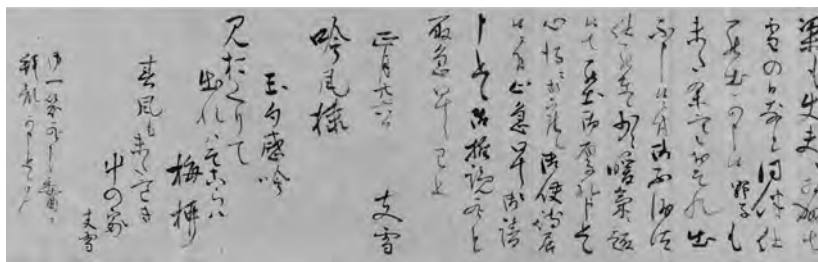
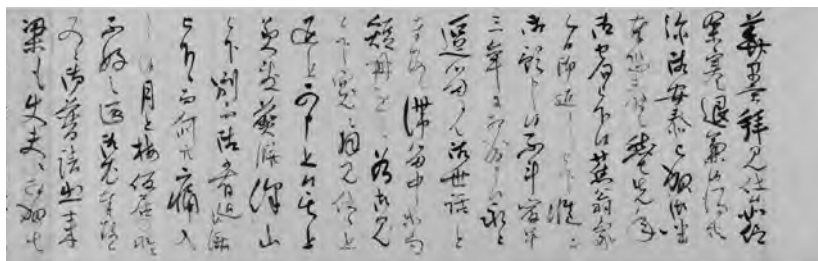
堀赤水「松は松」短冊

9

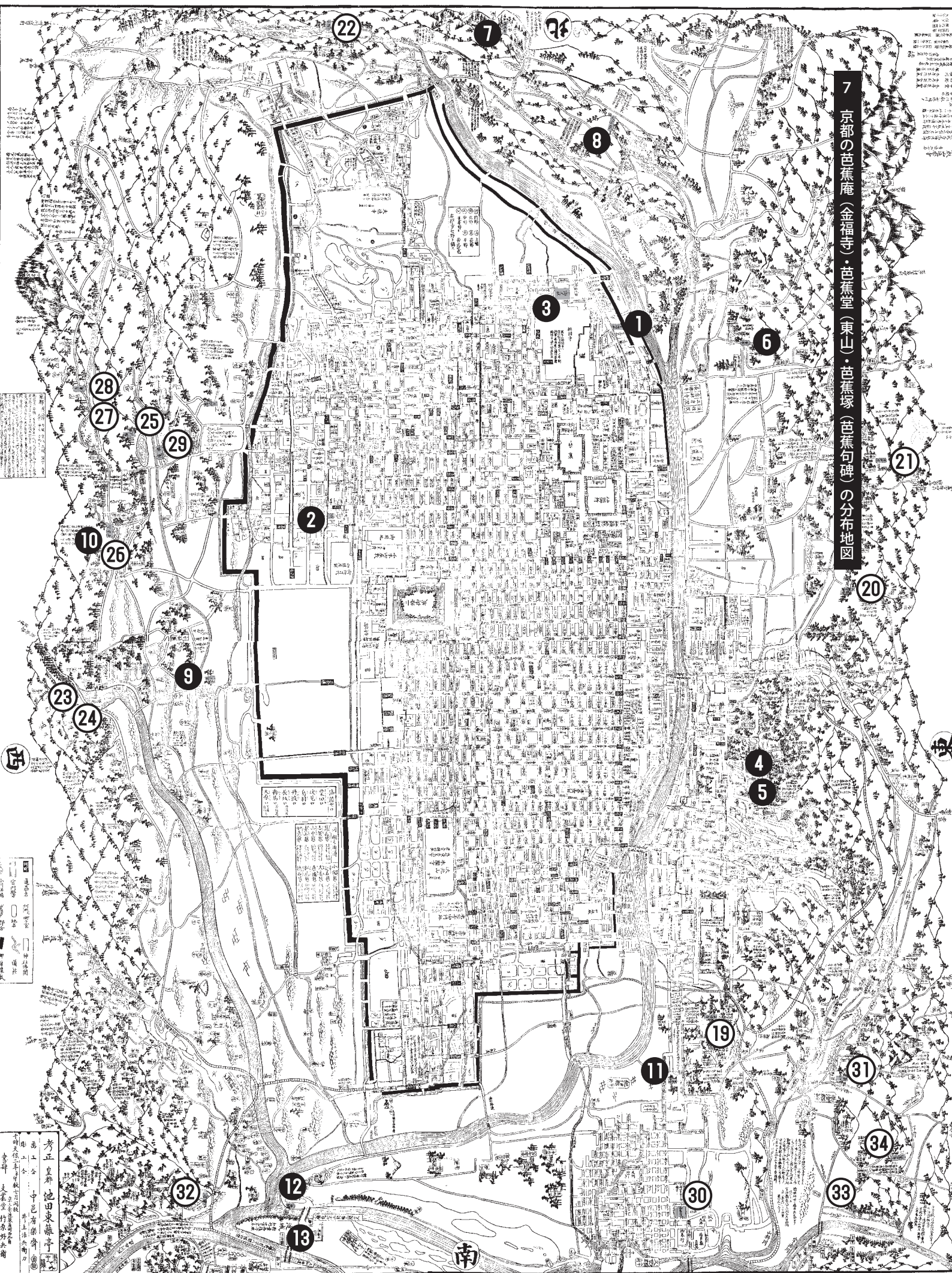
堀赤水「松は松」短冊

「上池楼の蕉翁像みの虫庵に遷座 松は松又涼しかる竹の月 赤水」

赤水は、淀藩士。「上池楼」は、淀城内にあり、淀連中が俳諧を楽しんでいた場所。「みの虫庵」は、吟風の庵号。淀連中の芭蕉像は、藩内を遷座して守られていたことが知られる。淀連中の芭蕉顕彰に関する右の8関連資料である。



7 京都の芭蕉庵（金福寺）・芭蕉堂（東山）・芭蕉塚（芭蕉句碑）の分布地図



南

考正 皇野 池田東藤亭
 西上全 中邑有崇 井上治典
 天明 天保 文政 嘉永 安政 享和 天保 文政 嘉永 安政 享和 天保 文政 嘉永 安政 享和



- ① 米塚 (上京・阿弥陀寺境内)
- ② 翁塚 (上京・五劫院墓地)
- ③ 神塚 (上京・御霊神社)
- ⑤ 仮名塚 (東山・双林寺墓地)
- ⑥ a 芭蕉庵 (左京・金福寺境内)
- b 祖翁之碑 (左京・金福寺裏庭)
- d 閑古鳥塚 (左京・金福寺裏庭)
- ⑧ 雪見塚 (左京・旧岩倉大雲寺参道)
- ⑨ 大竹藪塚 (右京・車折神社地主神社)
- ⑪ 我衣塚 (伏見・西岸寺)



近世丹後

No.	名称	碑文	区域	場所	時代	建立者	備考
14	一声塚	一声の江によこたふやほとときす 芭蕉翁	丹後	天橋立砂洲	明和4年5月12日	宮津連中	『諸国翁墳記』登載、記念句集『一声塚』・『一声塚百回忌』
15	烏塚	何に此師走の市に行からず（表） ／木越建（裏）	丹後	田辺（西舞鶴）円隆寺	寛政5年10月5日	逸見木越	『諸国翁墳記』登載、記念句集『烏塚百回忌』
16	数珠塚	涅槃会や皺手あはする数珠の音 芭蕉翁	丹後	河守 清園寺	寛政5年10月	無諍上人	記念句集『数珠塚集』
17	月梅塚	春もやややしきととのふ月と梅 甫尺拝書	丹後	石川 神宮寺	享和・文化頃	甫尺	
18	梅が香塚	梅か香にのつと日の出る山路かな 芭蕉	丹後	須津 須津彦神社	近世後期か	未詳	

近代以降山城

No.	名称	碑文	区域	場所	時代	建立者	備考
19	古池塚	ふる池や蛙飛こむ水の音 はせを	東山	東福寺	明治26年11月19日	不識庵聴秋	
20	古池塚	古池や蛙飛込む水の音 はせを	左京	永観堂	近代	獅子門	獅子門歴代句碑の一つ
21	鵜舟塚	おもしろうてやかて悲しき鵜舟かな 芭蕉	左京	法然院高木家墓地	近代	高木家	灯籠
22	雉子塚	父母のしきりにこひし雉子の声 はせを	左京	雲ヶ畑墓地	近代	未詳	福井要著『京都の芭蕉句碑』による
23	二丁塚	花の山二丁のほれは大悲閣 はせを	右京	大悲閣	明治11年3月	角倉閑岳	山中信夫書
24	嵐山塚	六月や峰に雲おくあらし山 はせを	右京	大悲閣	大正5年10月	山口嵐更	
25	夜もすがら塚	名月や池をめぐりて夜もすから はせを	右京	広沢の池	大正13年	未詳	三宅安兵衛の遺志によるという。
26	色紙塚	五月雨や色紙へきたる壁の跡 芭蕉	右京	落柿舎	昭和37年秋	飯野哲二他	
27	青松葉塚	清滝や波に散り込青松葉 芭蕉翁	右京	鳥居本落合橋	近代	未詳	
28a	青松葉塚	清滝や波に散り込青松葉 芭蕉翁	右京	鳥居本落合橋	昭和46年8月	落柿舎保存会	
28b	詞碑	省略	右京	鳥居本落合橋	昭和47年4月	高桑義生	
29	鶴塚	梅白しきのふや鶴を盗まれし 桃青	右京	御室川左岸（鳴滝）	昭和51年11月	地元有志	
30	梅が香塚	梅か香にのつと日の出る山路かな 翁／応々といへと敲や雪の門 去来	伏見	御香宮神社	明治26年11月	落柿舎桃年	
31	留守塚	留守といふ小僧なふらん山桜 はせを	伏見	醍醐 法界寺（日野薬師）	明治27年3月	南園社	
32	杜若塚	ありかたき姿おかまむ杜若 芭蕉	伏見	山崎宗鑑邸跡	近代	未詳	
33	時鳥塚	木かくれて茶摘みも聞くやほとときす 芭蕉	宇治	放生院橋寺	昭和44年秋	未詳	
34	山吹塚	やまふきや宇治の焙炉の匂ふとき 芭蕉翁	宇治	三室戸寺	近代	未詳	

近代以降丹後

No.	名称	碑文	区域	場所	時代	建立者	備考
35a	初時雨塚	けふはかり人も年よれ初しくれ はせを	丹後	宮津 巖松山如願寺	明治26年10月12日	時雨庵今林醉堂	
35b	月梅塚	春もやややしきととのふ月と梅 はせを	丹後	宮津 巖松山如願寺	明治33年1月2日	巖松社	藤原言長書
35c	芭蕉堂	———	丹後	宮津 巖松山如願寺	明治33年1月2日	巖松社	芭蕉木像を安置する。
36	芭蕉堂	———	丹後	与謝郡水戸谷 山添山安養寺	昭和8年5月5日	喜楽庵山添山青	『続々天橋百吟』に境内配置図があるが、現存しない。

京都の芭蕉塚

- 凡例 一、旧漢字体は原則として常用漢字体に改めた。
 一、区域は現代の区分による。
 一、参考文献 一 出口対石著『芭蕉塚』昭和18年長崎書店
 竹村俊則著『新撰京都名所図会』昭和33年白川書院
 福井要著『京都の芭蕉句碑』平成9年私家版
 弘中孝著『石に刻まれた芭蕉』平成6年星雲社
 一、京都の芭蕉塚は、近世期は山城と丹後、近代以降は京都府下に建立のものを収集した。

近世山城

№	名称	碑文	区域	場所	時代	建立者	備考
1	米塚	春立や新年ふるき米五升 芭蕉翁 (表) / 吉備笠岡社中 都鄙社 友 (裏)	上京	阿弥陀寺境内	近世	五升庵蝶夢	『諸国翁墳記』掲載
2	翁塚	芭蕉翁 (表) / 元禄七甲戌歳十月十二日 (裏)	上京	五劫院墓地	近世	許尔門連	『諸国翁墳記』掲載
3	神塚	半日は神を友にやとし忘 はせを (表) / 慶応元乙丑歳秋九月 (裏)	上京	御霊神社	慶応元年9月	一瓢社、出雲路社、花弟舎徒	
4a	芭蕉堂	——	東山	旧双林寺境内	天明6年3月12日 花供養会を始める	高桑闌更	芭蕉を祭り、花供養会を修して以後、例年のごとく俳諧興行を行い、全国から献句を求め、『花供養』を刊行。
4b	南無庵	——	東山	旧双林寺境内	天明4年5月建立	高桑闌更	寛政元年刊『奉納集』の幡水序文に南無庵建立のいきさつを記す。
4c	許六刀 芭蕉木像	——	東山	芭蕉堂内	近世中期	森川許六	許六が庭の桜木を彫刻し、河合智月に与えたという。
4d	芭蕉堂之碑	省略	東山	芭蕉堂境内	寛政5年10月	武州本庄双鳥、金沢黎松	寛政元年刊『奉納集』の天明六年九月龍公美の「双林寺芭蕉堂記」を石に刻んだもの。
5	仮名塚	省略	東山	双林寺墓地	宝永7年	各務支考	『諸国翁墳記』掲載
	菖蒲塚	ほととぎすなくや五尺のあやめく さ はせを (表) / 文政庚辰 千崖 (裏)	北区	等持院中町 旧北山安二郎宅	(文政3年 金沢に建立)	築瀬千崖	文政3年に千崖が金沢で建立したものが、昭和13年頃に北山家へ移され、さらに昭和28年には東京へ移された。(出口・福井)
6a	芭蕉庵	—	左京	金福寺境内	安永6年9月	与謝蕪村	昭和30年代の絵葉書。
6b	祖翁之碑	省略	左京	金福寺境内	安永6年9月	蕪村、道立他	越後藩学者永忠原書
6c	翁之水	—	左京	金福寺境内	近世	——	翁の井戸とも (出口)
6d	閑古鳥塚	うき我をさひしからせよかんこ鳥 はせを翁 (表) / 四世落柿舎社中 建之 (裏)	左京	金福寺境内	文政5年	落柿舎四世吾同社中	
7	文塚	はせを翁 文塚	左京	鞍馬観音堂	宝暦13年10月12日	貫古	『諸国翁墳記』掲載。『文塚集』刊。
8	雪見塚	いささらは雪見にころふ処まで 芭蕉翁 (表) / 天明四年十月十二日 大華亭泰溪 伊佐自来建之 (裏)	左京	旧岩倉大雲寺参道	天明4年10月12日	大華亭泰溪、伊佐自来	
9	大竹藪塚	ほととぎす大竹やふをもる月夜 芭蕉翁 (表) / 安政三年丙辰仲春 落柿舎丈翠 洛社中 嵯峨社中 (裏)	右京	車折神社地主神社	安政3年2月	落柿舎丈翠、洛社中、嵯峨社中	
10	落柿舎	——	右京	嵯峨	貞享頃	向井去来	明和七年に、去来の外戚である井上重厚が再興し、以後継承されている。
11	我衣塚	芭蕉塚 我衣にふしみの桃のしつ くせよ (表) / 文化歳在乙丑初冬 刑部卿貞直書 (裏)	伏見	西岸寺(油懸地藏尊)	文化2年10月	未詳	
12	草の庵塚	(蓑虫の音を聞きに来よ) 草の庵 はせを	伏見	納所 妙教寺	近世期か	畑吟風か。妙教寺は吟風の養子忠篤の実家。	石が半分には割れ、下の句「艸の庵」と「はせを」のみ残る。
13	蓑虫庵	——	伏見	淀 五番町	天保から安政頃	淀藩士畑数馬吟風	吟風の蓑虫庵に芭蕉像を遷座したという。蓑虫庵・芭蕉像は現存しない。

10 義仲寺編『諸国翁墳記』二冊

櫻井文庫

半紙本各一冊。義仲寺蔵版、のちに京都橘屋治兵衛刊。義仲寺の頒布品のひとつ。『諸国翁墳記』は、宝暦一一年の序を持つ一〇〇基余りを収録するものから継続的に追加され、安政五年の建立を含む四一二基を収録するものまでがある。

本展示の一冊は、序文を有する一三丁の小冊で、最も初版に近いものと推察される。なお序文は、一九丁仕立・二五丁仕立の版本には継承されている。また、もう一冊は、二〇・二二丁を欠くが五七丁、安政三年冬の建立を最後に載せ、橘屋治兵衛の刊行で、かなり大部な書冊である。

『諸国翁墳記』には、所在地・建立者・碑面の発句などを追録し、全国に披露した。義仲寺が長い期間にわたって展開した芭蕉顕彰事業のひとつである。江戸期の芭蕉塚は、義仲寺の墓を「本廟」とし、各地の芭蕉塚は芭蕉を供養する墓であった。芭蕉の立ち寄った記念碑ではない。京都でも芭蕉塚が建立され、本書に収録されているのは、山城では米塚・翁塚・仮名塚・文塚、丹後では一声塚・烏塚である。12頁の「京都の芭蕉塚」参照。

11 丹後宮津連編『一声塚』

糸井文庫

半紙本一冊。京都橘屋治兵衛刊。丹後宮津に建立された「一声塚」を記念して出版された俳諧撰集。明和四（一七六七）年一〇月一二日序。一声塚は、義仲寺の芭蕉墓の土を蝶夢が自ら携えて宮津に赴き供養とした。一声塚は『諸国翁墳記』に「一夢塚」で掲載され、碑面の芭蕉句は「一声の江に横たふや時鳥」で、景勝天橋立にちなむ句として刻まれている。京・丹後の芭蕉顕彰事業のひとつである。

12 逸見木越編『烏塚百回忌』

糸井文庫

半紙本一冊。京都橘屋治兵衛刊。芭蕉百回忌によせて丹後田辺に建立された「烏塚」を記念して出版された俳諧撰集。寛政五（一七九三）年一〇月五日俳諧興行。烏塚は、義仲寺の芭蕉墓の土を運んで供養とした。烏塚は『諸国翁墳記』に掲載され、「丹後田辺知恩院／何にこの師走の市に行烏／木越」とある。『一声塚』同様に、京・丹後の芭蕉顕彰事業のひとつである。

13 中野石外編『嵐山集』

櫻井文庫

内題「俳諧嵐山集」。半紙本。丁数 一三三丁。版元「京東洞院仏光寺上ル御摺物細工所 菊屋平兵衛」。刊年 嘉永二年春。表紙 薄緑色の布目地模様、朱色と緑色の柿の画。裏表紙は柿の葉が一枚。落柿舎にちنانで趣向を凝らした俳書である。

一丁目表に、嵐山の画、車折大明神と「弘化丙午秋九月再興落柿舎」図が、裏には「上嵯峨山本村」と「下嵯峨杜之町」図が描かれる。跋文 一水舎春亭。去来の落柿舎を弘化三年（一八四六）に再興した石外が、筑前福岡の石外社中の発句・歌仙を『嵐山集』から抜粋した句集である。完本は、五八丁である。

落柿舎は、向井去来の別荘であるが、その没後に途絶えた。明和七（一七七〇）年に井上重厚が再興して、今日まで継承されているが、その所在については転々としている。

14 『京みやげ 東山之部』

櫻井文庫

京都案内書。題簽には、「東山之部一」とあるので、続いて刊行する予定であったのだろうが、「二」以下については刊行されなかったようである。刊行は、慶応二（一八六六）年（序文による）。序文は、「静水学人」書の漢文と「洛西半楽居士」のかかな文の二文。著者は不明。半楽居士の序文によれば、「一言かい添ておくりぬるを、やがて端書にとりなしたるは例の商人の業なりかし」と書かれているので、版元が企画したものであろう。版元は翠栄堂。挿絵は松川半山画（二四丁裏）。松川半山は、文久元年刊行の『淀川兩岸一覽』の挿絵画家である。版型は中本。丁数は、二五丁。

東山山麓の二三カ所の画を見開きで描き、その名所の由来・漢詩・和歌・発句などを上部に書く。二二丁裏・二三丁表に双林寺が描かれる。「寺中に康頼・西行・頼阿の墓あり。はせを堂・大雅堂あり」と頭書され、南無庵の屋根も下部に描かれる。

15 秋里籬島撰『都名所図会』・『拾遺都名所図会』

立命館大学アート・リサーチセンター蔵

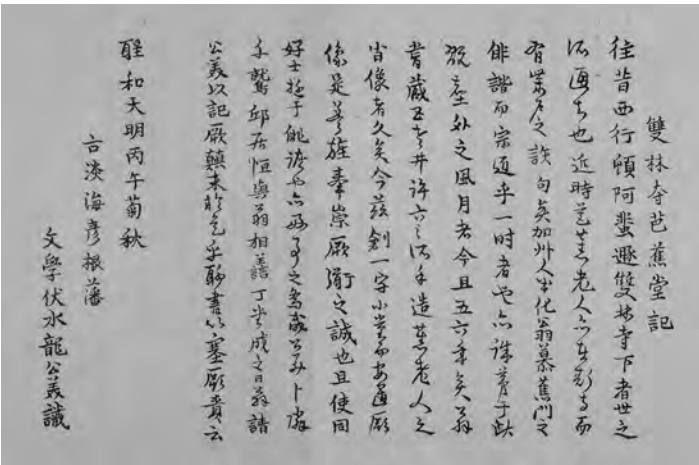
『都名所図会』は、従来の地誌とは異なり、詳しい解説と絵図が載せられた

京都最初の名所図会である。『拾遺都名所図会』は、その続編。刊年は、『都名所図会』が安永九（一七八〇）年、『拾遺都名所図会』が天明七（一七八七）年。版型は、共に大本。巻数は、『都名所図会』が六巻六冊、『拾遺都名所図会』が四巻五冊。画工は、竹原春朝・斎信繁。挿絵は、神社仏閣などの鳥瞰図、人々の生活や風俗を描いた生活図・風俗図があり、ともに写実的である。東山の芭蕉堂は、『拾遺都名所図会』二巻上に真葛ヶ原一帯の鳥瞰図のうちに描かれる。この画には、南無庵と芭蕉堂が描かれ、南無庵の建物がつきりわかり、芭蕉堂が敷地の奥に位置するのも明らかである。16頁18の1参照。また、二巻下には一乗寺村の金福寺内の「芭蕉庵」が描かれる。

高桑蘭更編『奉納其三集』

半紙本一冊。寛政五（一七九三）年、菊舎太兵衛刊。嘉菊（三井氏）・蘭更の俳諧興行や、定雅・百池・紫暁・月峰・甫尺・秦夫・重厚・江涯・二柳・可都里・蓼太らの発句を集め、洛東芭蕉堂に奉納した撰集。『奉納其三集』には刊

堀家文書



年が記されていないが、堀秦夫が寛政六年に「南和」と改号する以前の「秦夫」で出句していること、『奉納其二集』が寛政四年春の成立であることから、寛政五年の成立と考えられる。『奉納集』は、寛政元年七月刊、天明六年龍公美（草廬）の「双林寺芭蕉堂記」と、芭蕉堂・南無庵の謂れを記す幡水の序文をもつ。「双林寺芭蕉堂記」は、同二・三集へと継続掲載され、石に刻まれて芭蕉堂の傍らに現存する。

堀秦夫筆「はたを草」

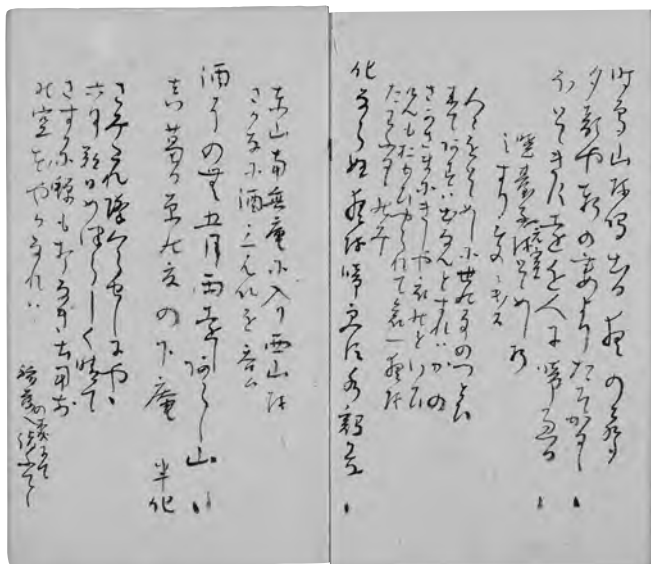
堀家文書

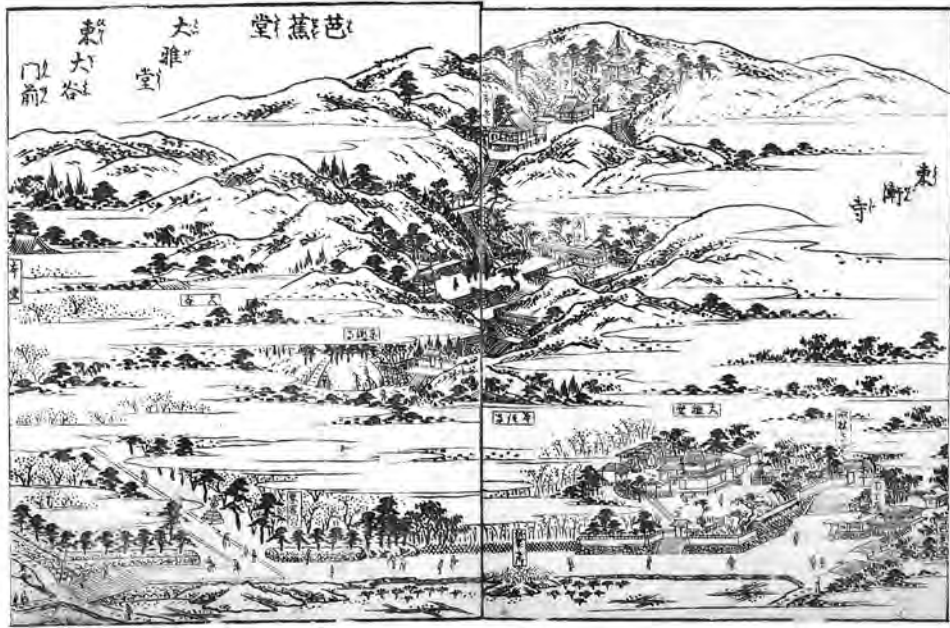
写本一〇冊。南山城陽寺田の秦夫の句稿集。秦夫は、堀治佐衛門則辰、寛保三（一七四三）年生、寛政一二（一八〇〇）年没、寺田の庄屋職。俳諧は樗良門、はじめは望月武然に交わる。与謝蕪村の評を受けたことも記されているし、別に蕪村の点帖も現存する。『はたを草』は、安永四（一七七五）年から寛政九年までの寺田連中と洛中の俳諧連中との交際が記されている。蘭更との交際は安永の頃からある。天明四年五月に、南無庵の建立の記載が、

東山南無庵に入り西山をさかなに酒三ばいを呑ム

酒ぞのむ五月雨遠しあらし山、（はたを）
真葛が原の夏の下庵 半化

とある。ただし、秦夫が南無庵・芭蕉堂を訪問したのは、天明八年夏のことである。





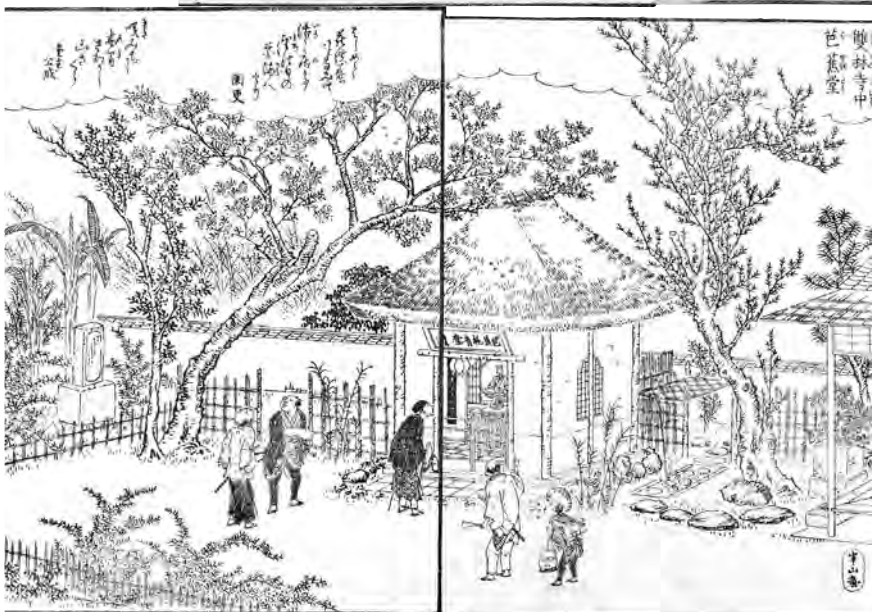
※南無庵は、東向き上り坂の西向きであり、入口には階段がある。
芭蕉堂は庭の奥にある。

1



※南無庵は、塀をしつらえ、北向きに門が構えられている。
芭蕉堂は庭の奥にある。

2-1



2-2

- 1 天明7（1787）年の『拾遺都名所図会』
- 2 文久2（1862）年の『再撰花洛名勝図会』
- 3 昭和18年の出口対石画
- 4 昭和33年の竹村俊則画・写真
- 5 平成6年の図録「芭蕉と近江の門人たち」（大津市歴史博物館編）所収写真
- 6 平成22年8月撮影 芭蕉堂内



4-2



3



4-1



6

※平成の初めに、南無庵を新築し、芭蕉堂を門の脇に移した。



5

森川許六刀芭蕉木像・河合見風筆箱書

常光庵（芭蕉堂）藏

京都東山芭蕉堂に創建当時から安置されていた芭蕉の木像（本尊）である。所伝によれば、ながく寛政六（一七九四）年に關更が造らせた芭蕉翁像の胎内仏となっていた。一時期この芭蕉像が紛失したこともあり、三三年ぶりに良大が取り戻したとする記録がある。

彦根の芭蕉門人である許六（五老井）が、大津の同門の智月（ちげつ）に乞われ、自庭の桜木を用いて彫刻したもの。伝存する許六作の芭蕉木像の中では最も大きなもののひとつ。

初代堂主の關更がこの木像を入手した経緯については、天明七（一七八七）年刊行の『拾遺都名所図会』に詳しく、智月の手を離れて以降、越中、加賀の地に流伝し、關更の所持となった旨を伝えている。

なお、箱書によれば、加賀国津幡の俳人河合見風がこの木像を一時期所持していたことがわかる。（口絵Ⅰ参照）

五老井桜木をもて／此像をつくり尼知月に／あたふ。其志のあはれを／伝ふ。けふ小春之十二日／なれば、花をおもひ一硯に／涙をこぼして／

いますかと思ふ翁や／枯ざくら

見風 印

五仲庵澤有節所持芭蕉木像・笈

常光庵（芭蕉堂）藏

やや大ぶりの芭蕉像で、笈の中に安置されている。扉の墨書によれば澤家伝来の由。有節が愛蔵した木造像であるが、芭蕉堂に寄進したもの。有節はもと信州上田の人。俳諧を小菰庵確嶺に学び、諸国を遊歴、天保八（一八三七）年に京に定住した。以後、成田蒼虬に師事し、嘉永期以降、広く流行の名吟を撰び、初学者への啓蒙を意図した年刊句集『芳新集』を出版する。江戸後期の京を代表する俳人で、花供養の常連のひとつでもある。住所は「京四条通高倉西へ入北側」、「東洞院四条上ル東側」と伝えられている。（口絵Ⅰ参照）

芭蕉堂門人録

常光庵（芭蕉堂）藏

芭蕉堂一世の關更から一六世岩井如醉までの門人録。各堂主の名前と経歴等を記し、続いて門人の名前と経歴等を記す。醉古庵（若林）史明が、大正一二年三月に、紛失していた門人録を再録し、続補すべしと記している。その後、

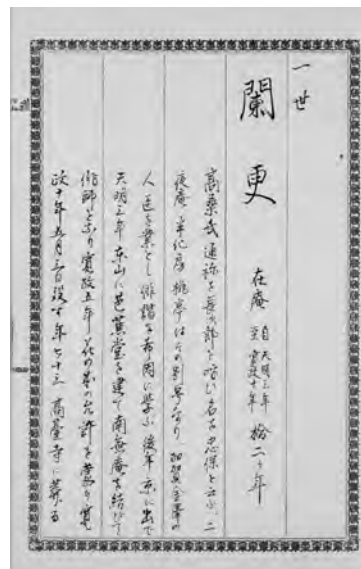
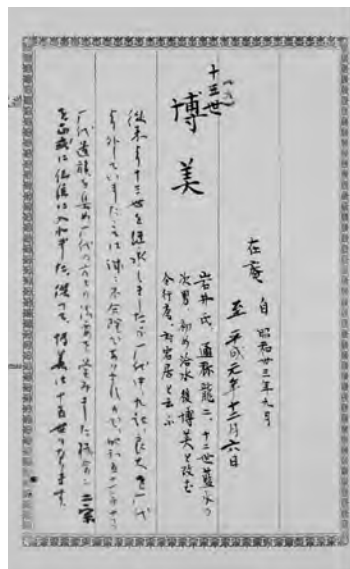
昭和五一年一〇月、一五世岩井博美は、代々の堂主から外されていた九起・良大を復帰させた」と記述している。門人録の歴世系図によって、両名の復帰後の歴代堂主を順に記すと、以下のとおりである。

- 開祖 關更。二世 蒼虬。
- 三世 千崖。四世 朝陽。
- 五世 九起。
- 六世 公成。
- 七世 良大。
- 八世 壺公。
- 九世 南徳。
- 一〇世 楓城。
- 一一世 梅雄。
- 一二世 楓崖。
- 一三世 露翠。
- 一四世 藍水。
- 一五世 博美。
- 一六世 如醉

木村明啓・川喜多真彦撰『再撰花洛名勝図会 東山之部』

西園寺文庫

地誌。『都名所図会』『拾遺都名所図会』の改訂増補をめざし、六編を予定していたが「東山之部」のみ刊行。小沢華岳・井上左水の両名の画は、『都名所図会』の画を修正して使い、他に画者は、松川半山・四方春翠・榎川東居。文久二（一八六二）年九月成立。江戸（二軒）・大坂（三軒）・京都（三軒）の三都版。本書の芭蕉堂は、現在の芭蕉堂の芭蕉木像・看板「芭蕉桃青堂」・窓の設えと



23

同じである。なお、この芭蕉木像は、許六刀芭蕉木像と異なり、寛政六（一七九四）年に關更が造らせた芭蕉翁像であろうか。

「東山」の地域は、四条橋を中心とし、南限は稲荷三ヶ峰、北限は鹿ヶ谷如意嶽で、『都名所図会』よりも詳細で、参考文献を引用し、多数の詩歌発句を掲げる。「双林寺中芭蕉堂」も『拾遺都名所図会』よりも詳細である。龍公美（草廬）の碑が見え、芭蕉の木が三本植わっている。

『花供養』

口絵Ⅱ「展示『花供養』一覧」参照。

表紙は年によって異なることが多く、なかでも同年で異なる表紙を用いたものもある。安政元（一八五四）年本の表紙は、展示の櫻井本が薄青色であり、月明文庫・立教大学本が薄茶色である。また、同年の近江屋利助の印記も、櫻井文庫・月明文庫・立教大学・柿衛文庫本のそれぞれで異なる。

書誌については、立命館大学アート・リサーチセンター紀要10号所収の京都俳諧研究会稿「『花供養』書誌」に発表したのが、本図録に「『花供養』書誌一覧表」を改訂して表紙一覧を追加した（33頁参照）。なお、本図録中の記号・略称などはこれによった。

24

菊舎太兵衛刊 城南寺田社中再校『樗良発句集』

堀家文書

半紙本二冊。寛政四（一七九二）年再刻。『花供養』の最初の書肆である菊舎太兵衛の刊行物。菊舎は其成と号し、芭蕉堂一世關更の門人でもある。初めに京都三条御幸町西入ルに、のちには三条寺町西入ルにも店を構える。

菊舎は、はじめ三浦樗良門の堀秦夫・上田良水・竹嶋雲裡ら城南寺田連中に親しく交わっていた頃、書肆吉田九郎右衛門（玄化堂）や玄化堂甫尺の親戚である関係から書肆として出発する。『樗良発句集』の再刻・出版は初期の代表的な仕事である。芭蕉七部集など芭蕉関連の俳書を広く手掛け、芭蕉顕彰事業に貢献している。また、七部集・五人集・三代集などの出版があり、書肆としての企画力が注目される。なお、文化二三（一八一六）年『花供養』は次代の菊舎其篤である。關更は、洛東に芭蕉堂を開く以前から、寺田連中や、玄化堂、菊舎との親交があり、この人脈が芭蕉堂運営の基盤のひとつとなっている。

25

勝田喜右衛門刊

暮柳舎車大編『としのうち』

櫻井文庫

半紙本。一冊。刊記は「書林／京御幸町錦小路上ル／勝田喜右衛門」。成立は享和二（一八〇二）年冬。

勝田喜右衛門は『花供養』を寛政一一（一七九九）年から文化二（一八〇五）年にかけて担当しているが、享和三・文化元・文化二年は、勝田善助との相版。『近世書林版元総覧』によれば、寛政期から文化期にかけて俳書を出版した書肆である。寛政一年の『花供養』、同年『常盤の香』、寛政二年『景勝遊覧』には「四条通河原町西入」・享和三の『続柞原集』には「木屋町松原上ル三丁目」との住所が確認できる。また、勝田喜右衛門は、蘆涯と号して俳諧活動をおこなっており、『花供養』にも入集している。とくに、寛政元年版では巻頭発句を詠んでいる。

暮柳舎車大は、寛政期から文化期に活躍する俳人である。加賀国の人。小寺後川に師事する。寛政九年に三世暮柳舎を継承した。本展示の『としのうち』は亡師後川の三回忌にあたっての追善俳諧撰集である。

26

勝田善助刊

真鍋勲美編『さざなみ集』

個人蔵

半紙本。一冊。昼州序。瓜坊跋。刊記は「京烏丸下立売上ル／俳諧書林勝田善助」。奥付は「文化十一年甲戌夏／湖東／勲美輯」。成立は文化一一（一八一四）年夏。

勝田善助は、享和三（一八〇三）年から文化九年まで『花供養』を手掛けている書肆であるが、享和三・文化元・文化二年は、勝田喜右衛門との相版。『近世書林版元総覧』には「河内屋善助、橘栄堂、勝田氏」として挙がっており、寛政六年ごろから文政一二年ごろまで、俳書を出版している。車大の春帖「くさ摘」に関しては、文化三年から文化一四年まで毎年出版していたようである。前掲刊記に見える住所のほか、寛政九年『はるの吟』、同年『俳諧も、ちどり』の刊記には「富小路二条上ル丁」も確認できる。『花供養』をはじめ、勝田喜右衛門との相版本が多くみえ、書肆活動の初期にあつて助力を得たものと推察される。文化一〇年の『常盤樹』の刊記に「御文通取次所」とみえ、取次所としての機能も持っていた。また、勝田善助は、俳号を橘栄とする。文化一〇年刊『万家人名録』に、「勝田氏 号橘栄堂 俗称河内屋善助 蕉門俳諧書林 京都烏丸下立売住」とある。自らが出版に携わった『花供養』にも入集している。

叡美は、本姓赤松。生没年未詳。通称を全彌せんみといい、近江水口みなみの藩医。文化年中の人であるという。『さざなみ集』には江戸、尾張、浪花、若狭など全国各地の俳人の句が入集しており、とくに、撰者の叡美が近江の人ということもあり、彦根、伊香、大津、草津など、近江の地名が散見する。勝田善助も「橋栄」として句を載せている。

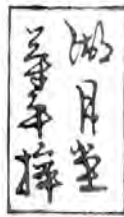
菊屋平兵衛刊

荒木万籟編ばんらい『逐々集』おおいしやう

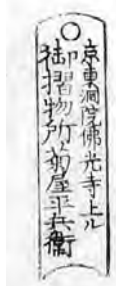
天保四年『花供養』（糸井文庫）



天保五年『逐々集』（糸井文庫）



天保一〇年『逐々集』（糸井文庫）



嘉永元年『喜春楽』（櫻井文庫）



糸井文庫

半紙本一冊。天保五（一八三四）

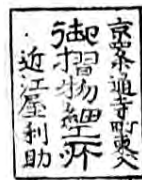
年刊。菊屋平兵衛は、『花供養』には、二世蒼虬主催の天保元年から五世九起主催の嘉永三（一八五〇）年までの間参入する摺物所である。ただし、天保一三年から嘉永二年までは、摺物所の近江屋利助と交互に担当する。湖月堂と号し、京都東洞院通仏光寺上るに店を構える。数種類の印記をもち、本展示では、嘉永元年二月序『喜春楽』、天保一三年夏序『夏かはづ』の刊記を出している。

万籟は、丹後宮津の人で荒木氏。別に花神窓かみんまどの号をもつ。安永八（一七七九）年に生れ、天保一三（一八四二）年三月一五日に没する。六四歳。天保二（一八三一）年、家業を譲り、その晩年ふたび京に出て風雅の道を選ぶ。天保五年以降、自撰の年刊句集『逐々集』の刊行を開始し、天保五、六年に宗匠としての立机を果たしたと思われる。なお、天保五年から一一年までの『逐々集』七冊が知られる。

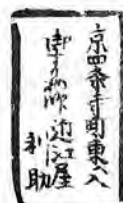
近江屋利助刊 北村杜鷺編『類題年毎集』

糸井文庫

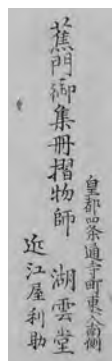
天保一三年『花供養』（糸井文庫）



弘化元年『類題年毎集』（糸井文庫）



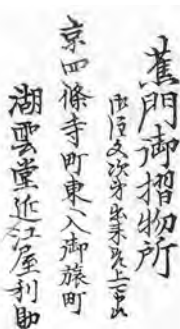
弘化二年『をりそへ集』（櫻井文庫）



安政元年『花供養』（月明文庫）



安政五年『花供養』（櫻井文庫）



半紙本一冊。弘化元（一八四四）年刊。

近江屋利助は、『花供養』には五世九起主催の天保一三（一八四二）年から六世公成主催の安政六（一八五九）年までの間参入する摺物所である。ただし、天保一四年から嘉永三年までは、摺物所の菊屋平兵衛と交互に担当する。湖月堂と号し、京都四条通寺町東入ル南側（御旅町）に店を構える。本展示では、弘化二年奥『をりそへ集』、嘉永六年序『四時行』の刊記を併せて出している。

杜鷺は、天明元（一七八一）年生、嘉永五（一八五二）年没。北村氏。通称を万屋五左衛門という。自身の姓をとり、北村庵の号を用いる。弘化四年序の『京都書画人名録』によれば、「洛東万寿山内」とするが、それより以前の天保期には「四条通堺町西へ入」に居を構えていた。旅籠はたごを営み、諸国からの文通取次所の機能を果たしていた。京都市中の宗匠として、また、嵯峨御所の「俳諧之会頭」としても活躍した。

『類題年毎集』は題号のとおり、年刊句集。芭蕉の忌日当日の追善俳諧と諸家からの発句を編んで集冊としたもの。北村庵内に芭蕉堂を設け、天保二年以降の一〇月八日に供養会を行っていた。天保三年『歳毎集』・同八年『年毎集』・同九年『としこと集』・同十二年・同十四年・弘化元年・同二年・同三年『類題年毎集』・嘉永元年『としこと集』がある。

29

『花供養』と俳人分布図

『花供養』入集者の地域を一覧した地図を四年分を作成した。入集者がいる地域は黒色、入集者がいない地域は白色に分けた。ⅢとⅣについてのみは、発句入集者数(延べ数)が確定できるので記した。22・23頁参照。

各年の状況に違いはあるが、数年間にわたってみると、およそ全国からの入集を得ているといえる。年代を追うとともに、出版技術・交通が発達し、増加する俳諧人口を取り込んでいる。なお、關更時代に入集が全くない地域は、因幡・伯耆・土佐・天草・沓岐・対馬・佐渡・松前。蒼虬時代に入集が全くない地域は、志摩・駿河・沓岐・天草・対馬・松前。九起時代に入集が全くない地域は、対馬・志摩。公成時代に入集が全くない地域は、美作・飛騨・志摩。

30

高桑關更「さみだれや」短冊

個人蔵

「さみだれや鼠のめぐるふるつら 關更」

關更は芭蕉堂二世。享保一一(一七二六)年生、寛政一〇(一七九八)年没。七三歳。通称長次郎。俳諧を暮柳舎希因(きいん)に学び、二夜庵・四夢庵・半化坊などの号をもつ。天明以降、京に定住し、同三年一〇月に双林寺地所を借り(本展示資料1参照)、同四年五月東山に南無庵を建立(本展示資料17参照)、翌五年南無庵の敷地内に芭蕉堂を設け、初代堂主となる。天明六年に最初の『花供養』を編み、在世中、一二回の上梓に及んでいる。寛政五(一七九三)年、二条家俳諧宗匠となる。高台寺月真院に葬る。

31

成田蒼虬「秋の夜の」短冊

櫻井文庫

「秋の夜のあはれにまけてねたりけり 蒼虬」

蒼虬は芭蕉堂二世。宝暦一一(一七六一)年生、天保一三(一八四二)年三月一三日没。八三歳。通称久左衛門。加賀国金沢の人。父の死後京に出、關更の門に入り、師なきあと、芭蕉堂主となる。天保三大家のひとり。天保五(一八三四)年一〇月から約一〇ヵ月間江戸に滞在し、翌六年四月に帰洛後は弟子の千屋に芭蕉堂を譲り、晩年は八坂に対塔庵を結ぶ。文政頃には、俳諧宗匠として広く活躍し、多忙の中に花供養を休刊することがあった。二条東山の妙伝寺に葬る。

32

畑吟風宛蒼虬覚書簡

畑家文書

畑吟風は淀藩士。父の竹楼も俳諧を好み、父子ともに淀藩俳諧連中の中心的人物である。吟風は芭蕉堂主蒼虬・朝陽・九起らと親交があり、『花供養』にも投句している。本書簡は、『花供養』一八冊の代金一兩二朱の受取状である。天保四(一八三三)年推定の花供養募句ちらし(25頁の37①)によれば、集冊付投句料が一朱。一八冊すなわち一八名分では一兩二朱となる。天保四年の淀藩士連中の入集は一八名。これらから本覚書簡は天保四年のものであると知られる。

覚

一 花供養集料 十八札金一兩二朱

右忝致入手候 以上

十一月二十一日 芭蕉堂蒼虬

吟風様

よごさずし雪を掃たる戸口かな
俵なりの跡つく雪の師走かな

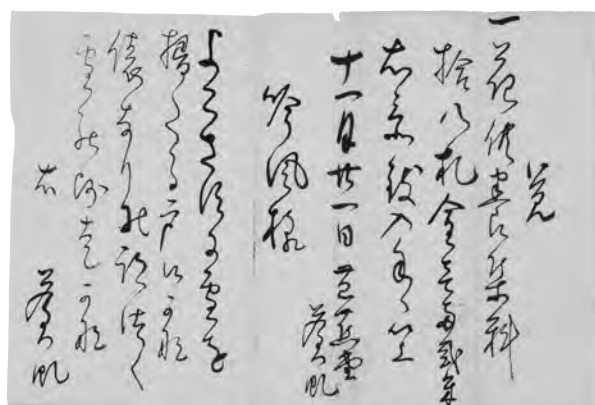
右 蒼虬

(印)

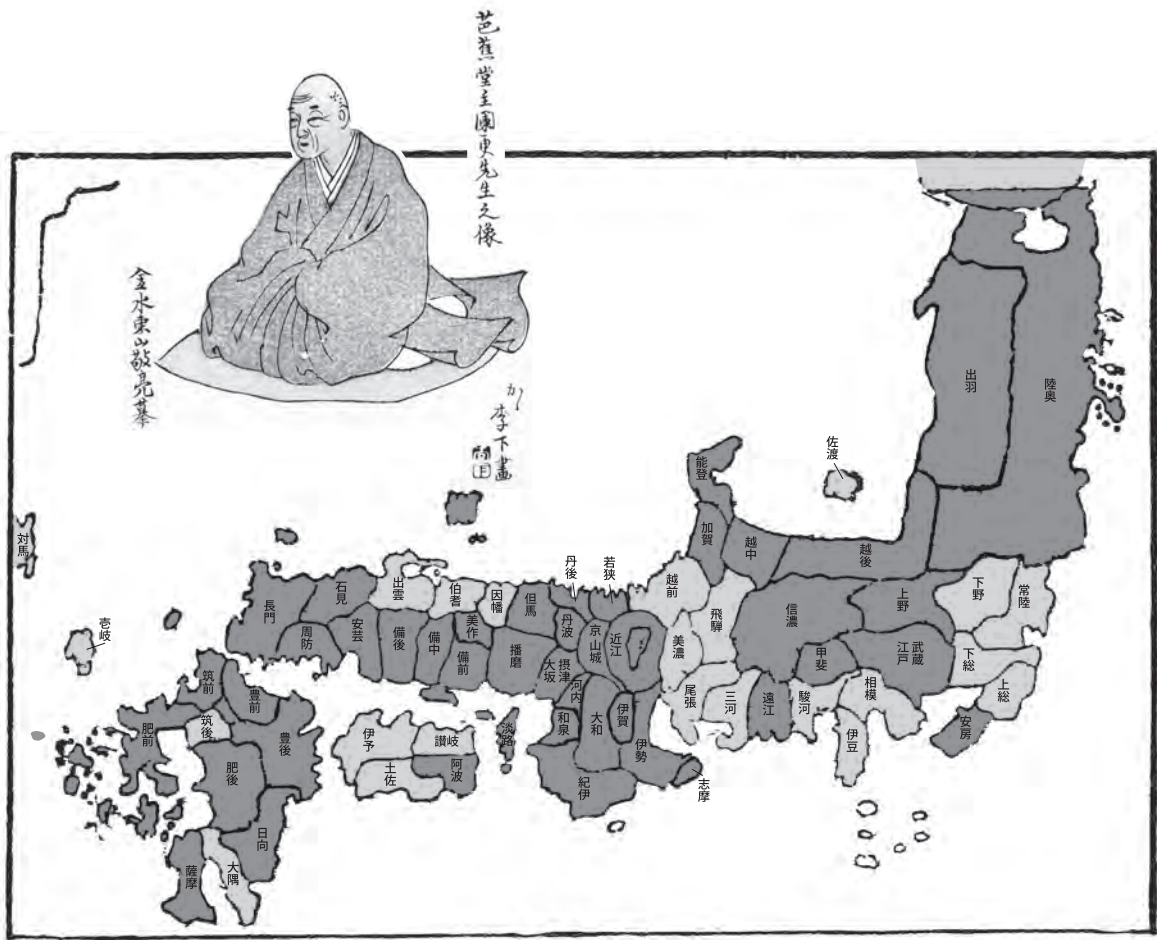
芭蕉堂記

(印)

芭蕉堂記

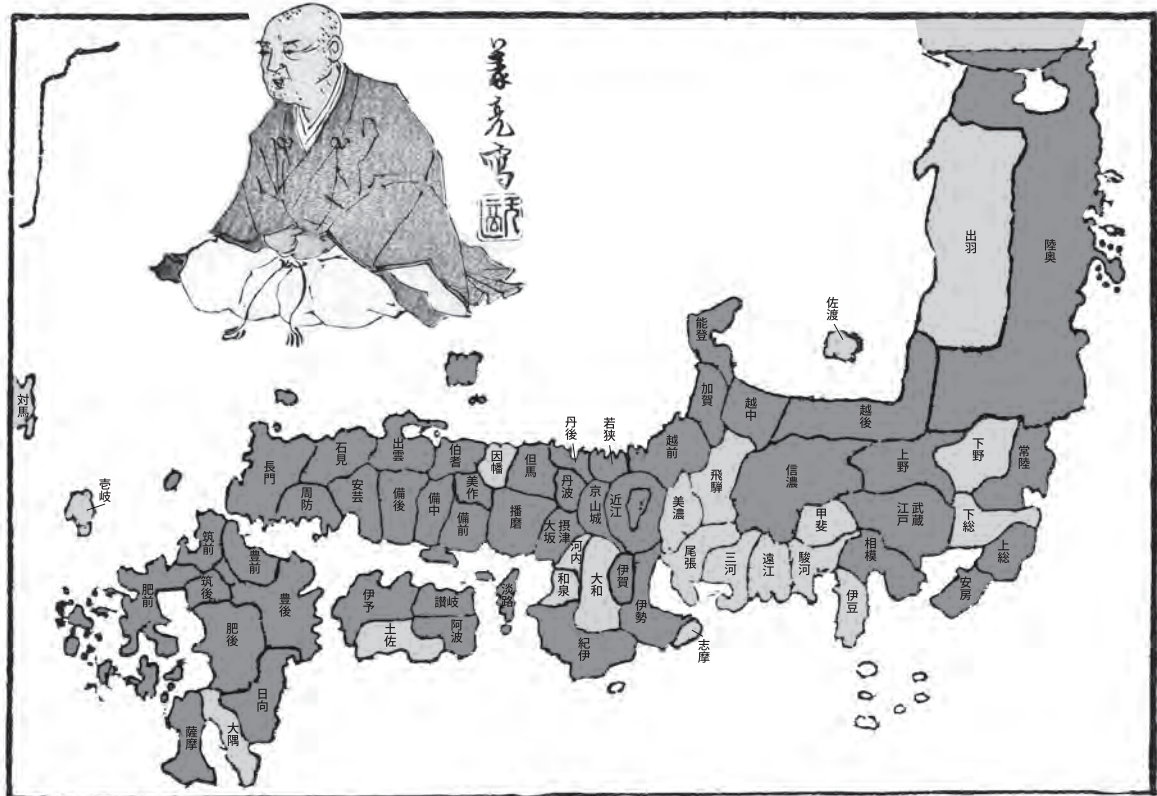


I 寛政六年關東主催『花供養』の俳人分布図



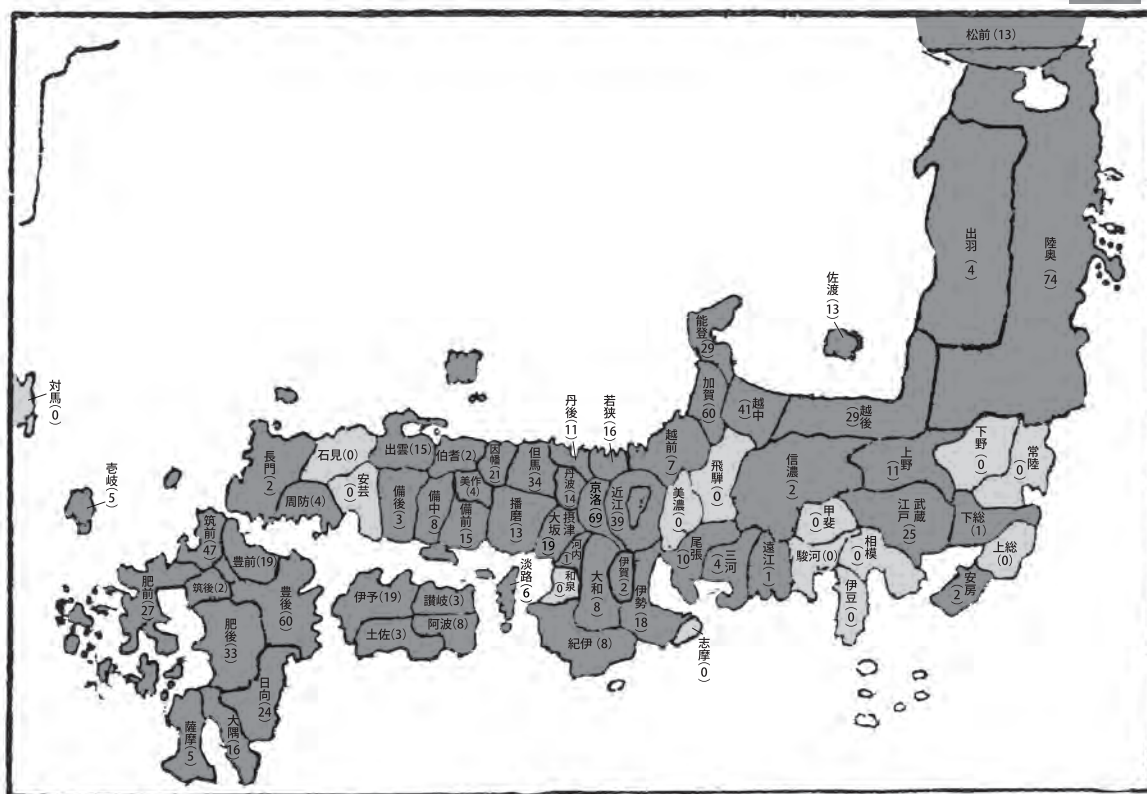
■ 入集
■ 未入集

蒼乳成田翁肖像



II 文化三年蒼乳主催『花供養』の俳人分布図

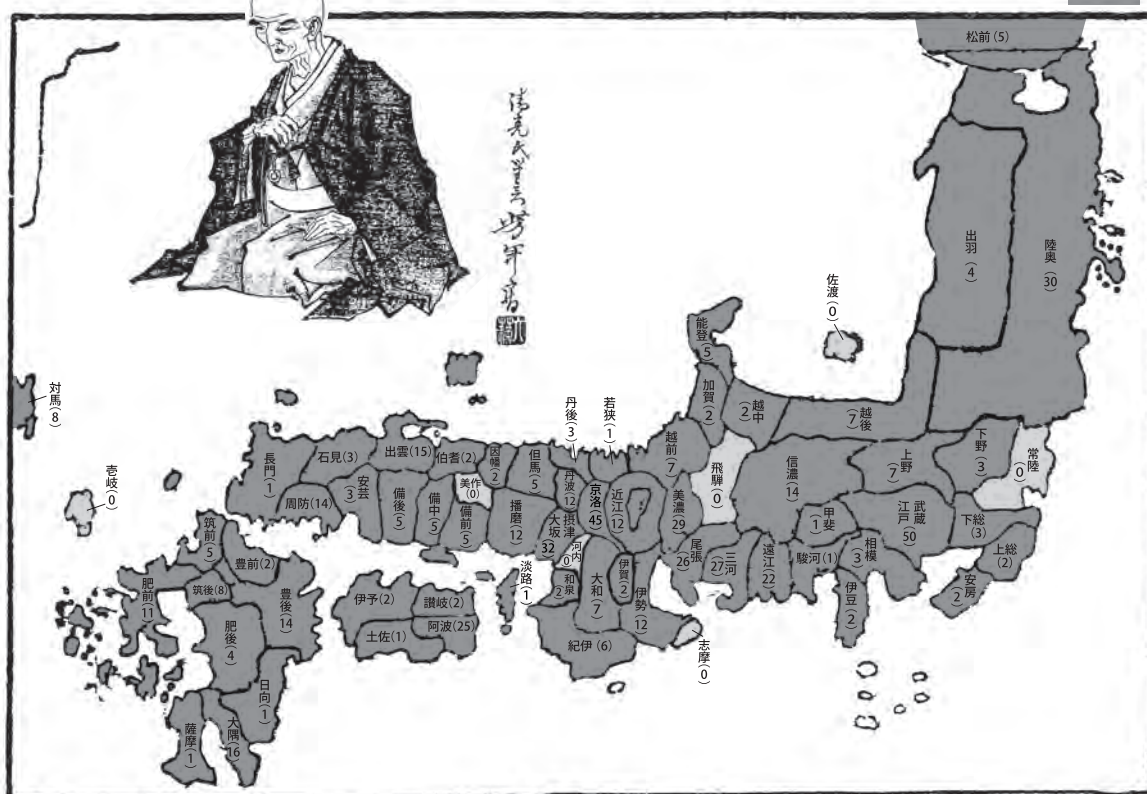
遊歴 (7)



III 弘化三年九起主權『花供養』の俳人分布図

公成翁肖像

風客 (30)



IV 安政五年公成主權『花供養』の俳人分布図

梁瀬千屋「中く」に」短冊

個人蔵

「賀初老 中く」に花は老木のさくら哉 千屋」

千屋は芭蕉堂三世。生年未詳、天保九（一八三八）年五月一日没。富山の人。竹梁、鈴斉の号がある。文化頃には京に住まいし、蒼虬に俳諧を学ぶ。天保六年、師の退隠後に芭蕉堂三世を継ぐが、常に諸国行脚をつづけ、その結果、千屋が編集した『花供養』は、天保三年のみが判明している。双林寺墓地に葬る。

河村公成編『芭蕉堂三代発句集』

櫻井文庫

中本二冊。安政六（一八五九）年十一月刊。京都南無庵蔵版。池永大虫板下。松月堂魚助彫刻。湖雲堂近江屋利助製本。芭蕉堂主闌更・蒼虬・千屋の三代の発句を四季類題別に編んだもの。同書の広告によれば、「紙数百五十七丁 句数二千四百七十三章 価金二朱」。巻頭に三代の肖像画を掲げ、和歌における俊成・定家・為家に倣って顕彰する。闌更の画は、加賀の李下の画を敬亮が模写したもの。蒼虬・千屋の画は、双林寺の辰亮（月峰）の息である義亮と清亮である。月峰は、文人画家（双林寺にあった大雅堂二代堂主も務める）であるが、俳諧作者でもあり、双林寺における俳諧活動を下支えた人物として注目される。清亮は、大雅堂三代堂主も継承した。

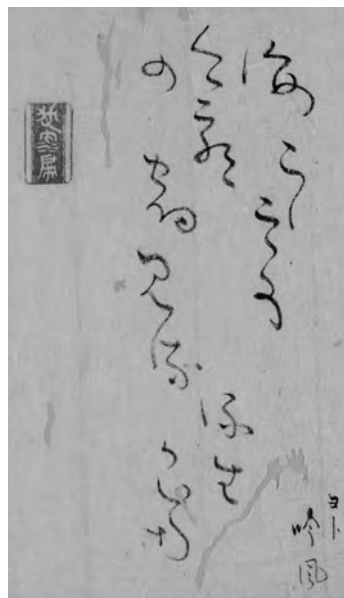
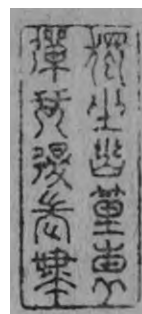
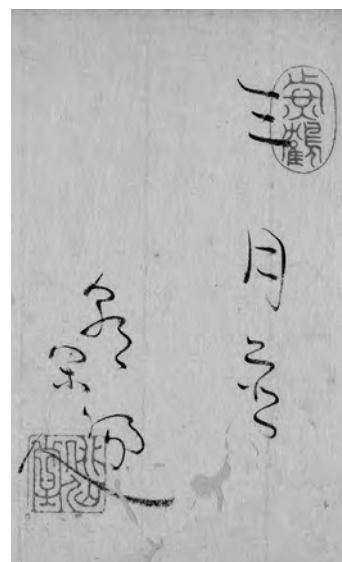
北村朝陽撰「月並諸国発句抜章」

畑家文書

横本写本一冊。縦一七〇糎、横二四〇糎。三六丁。紙綴綴。共表紙で、「月並／諸国発句抜章／芭蕉堂朝陽撰」とある。朝陽の俳仙堂堂主時からの点印を用いた点帖。朝陽の点印は、「李白」「華清宮」や王維の詩「独坐幽篁裏彈琴復長嘯」など漢詩文にちなむ詞句に特徴がある。本点帖は三月の月並に点を掛けたもの。朝陽は、近江の人。洛東の俳仙堂を天保四（一八三三）年頃に継承、天保九年の後半には芭蕉堂を継承するが、天保一二年九月九日に没する。本点帖は、天保一〇年前後の三月の成立と推察される。俳仙堂は近江坂本の三津川鳶雨が継承し、芭蕉堂は息の北村九起が継承した。本点帖は、半丁に一句を記し、それぞれに点が掛けている。作者は丹波・近江・南山城・加賀・紀伊国の連中。なお、淀藩士畑吟風句「海こして今朝の宿見る弥生かな ヨド吟風」が最高点であり、現在、本帖が畑家に残されている。なお、歴代芭蕉堂

主の点印は他に知られていない。

一丁表 三月並／朝陽閑人 俳仙堂



三六丁表 海こして／今朝の宿見る弥生かな／ヨド吟風



北村九起「飽はて、」短冊

個人蔵

「飽はて、蛙も鳴ず五月雨 九起」
九起は芭蕉堂五世、文化元（一八〇四）年生、明治一五（一八八二）年三月没。七九歳。北村氏、朝陽の子にして梅室門。父の後を継いで天保一一（一八四〇）年九月芭蕉堂五世となる。天保一四年の芭蕉一五〇回忌の追善法会を修め、『花

供養』九編を撰した。なお、九起の撰になる『花供養』は、菊屋平兵衛・近江屋利助方を隔年で用いている点が特徴的である。
一時期芭蕉堂歴代より除名されたことがあったが、昭和五十一年に復活を果たす。芭蕉堂退隠後は朝陽堂と号し、建仁寺萬寿庵中に居住した。

〔丹後俳人の摺物注文書翰貼込帖〕

糸井文庫

現在確認できる『花供養』の募句ちらし（引札）がどの程度あるのか、詳細は不明ながら、このちらし二点もまた、集冊が編集される際の入花料（投句料・掲載を含む）とプロセスを研究する際の貴重な資料になる。たとえば、天保一四（一八四三）年の芭蕉一五〇回忌追善の『花供養』は、異例の二冊の出版となったが、二月に募集を締切っている。安政頃の芭蕉堂公成のちらしには、三月下旬を締切とする。遡って、寛政五年のちらしには「二月切」とあって、二月、三月が募集の締切のようにも見える。『花供養』が天保以降、ほぼ欠けることなく定例の刊行となつてからは、おそらく三月二日の供養会終了後の三月いっばいが掲載期限となつたのではないだろうか。七月には出版される『花供養』におよそ三カ月の制作期間を想定することができる。

① 天保四年 蒼虬主催

凡例

一 花供養集 一句御施主料集冊進上 金一朱

但し春の句何にても

一 歌仙 御施主料 南鐐五片

一 表 同 南鐐一片

前書等発句文字数に准ず

一 月の会 花供養に准ず

但し秋の句何にても

右は蕉堂相統之集に候間 御出句希に料不添分は加入

不致毎年三月十二日八月十二日供養会相勤候間 御出席可被下候

芭蕉堂執事

届所書林

東洞院仏光寺上ル丁 菊屋平兵衛

② 天保一四年 九起主催

芭蕉翁百五十回追善集全二冊

発句加入 四季混雜 集冊呈上 入式 金二朱

歌仙加入 入式 同二百疋

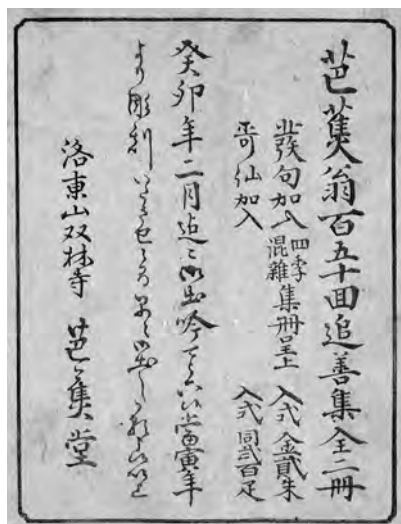
癸卯年二月迄に御出吟可被下候 当寅年

より彫刻いたさせ候間 早々御出し御願申候 以上

洛東山双林寺 芭蕉堂



①



②

38

河村公成「はじめから」短冊

個人蔵

「はじめから老て啼くか閑古鳥 公成」

公成は芭蕉堂六世、文化五（一八〇八）年生、明治元（一八六八）年没。六一歳。河村氏。六一歳。こうぜいとも俳号を読みならわしている。周防の人で、京に出て蒼虬の門に学ぶ。一説には梅室門ともいう。百古、一事庵、錦波の号を用い、九起の退去後、嘉永四（一八五二）年に芭蕉堂六世を継承する。歴代中、蒼虬に次ぐ一四編の『花供養』を撰した。なお、長州藩との関係を深くし、南無庵にて兇刃に没す。墓碑が双林寺墓地にある。

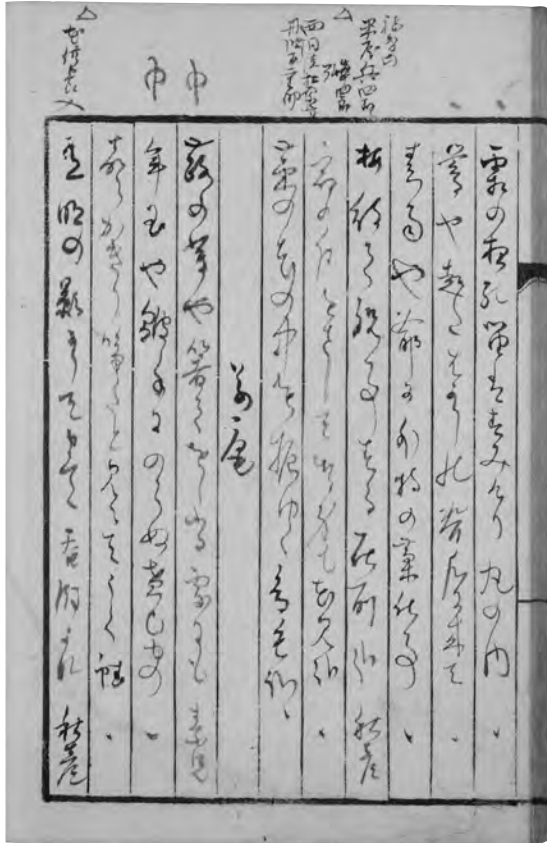
〔芭蕉堂発句留〕

半紙本一冊、公成の筆か。表紙中央に墨書で「発句留」とあり、右に「嘉永五年子十一月」の年記を残す。この年十一月までに芭蕉堂に到来した発句を書き留めた句帖。中には「花供養人」と頭注に記す句もあり、嘉永六（一八五三）年の『花供養』に入集する発句一七〇余を数える。歴代の堂主によっても同様に句帖がまとめられていたかは明らかではない。稀に伝存した一冊とみるべきか。



句帖には○の記号や俳人の住所が頭注のかたちでところどころ記されている。ちなみに四年・五年と中断していた『花供養』が公成の嘉永六年から再刊される。なお、小口部分に「三」の文字が確認され、嘉永五年分「発句留」の第三分冊目という意味か。

個人蔵



内海良大「人かげの」短冊

「聖廟 人かげの添はぬ日はなし梅の花 良大」

良大は芭蕉堂七世、天保五（一八三四）年生、明治二五（一八九二）年九月一五日没。五九歳。緑天居の別号を持つ。伊予国松山に生まれ、太田氏。内海淡節に師事し、養子となり内海姓を名乗る。後年に公成の門に入って、明治元年末に芭蕉堂七世を継ぐが、明治八年一〇月二八日、木村素名に後事を託して退去し、明治一一年春東京へ移住。同一三年に『俳諧明治発句集』（小本二冊）を出版した。一説に公成在世中の明治元年の初め、すでに芭蕉堂を継ぎ、同年刊行の『花供養』を撰したとも伝えられている。晩年は群馬県桐生町に住み、同町光性寺に葬られた。九起と同じく一時期歴代より除名された。

岩井藍水「暖き」短冊

「暖き日を吸ふ野辺やこゝろよき 芭蕉堂 藍水」

藍水は芭蕉堂一四世。一三世露翠から大正一一年四月に継承。慶応元年（一八六五）生、昭和三年三月六日没、九三歳。栖霞園二世。

個人蔵

芭蕉堂立机允可状

黒田泰、俳号甫夕は、明治三〇（一八九七）年生れ、昭和四〇（一九六五）年没。六八歳。昭和三〇年三月一〇日付で、芭蕉堂一四世岩井藍水より授かった立机

個人蔵

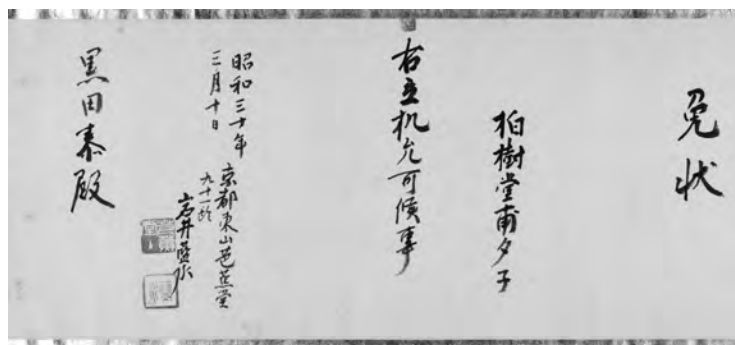
免許状。甫夕は京都府宮津市の人。昭和元年に俳誌「スギヤマ」を編集、創刊。その後「蜀葵」と改題し、いわゆる新派・旧派を超えた俳交を展開する。昭和一五年の廃刊まで通刊一六四号に達した。昭和三〇年一〇月、自選句集「松籟」を刊行。なお、「芭蕉堂門人録」（大正一二年新製）の立机免許状受領者一覧によれば、記録中の最後から二番目に該当する。芭蕉堂への推薦人は同じ宮津の俳人で俳諧史研究でも著名な小室洗心であった。

43

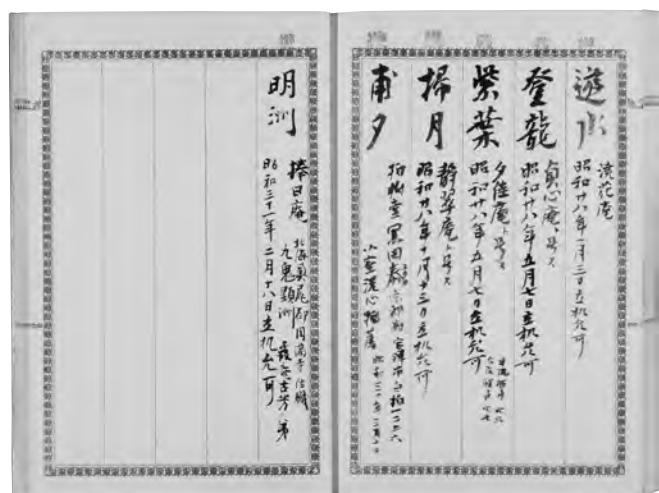
出藍
しゅらん

芭蕉堂一五世岩井博美の編集、発行になる雑誌。本点は、京都市東山区円山公園芭蕉堂内／出藍発行所から昭和七年四月一日付で出された第二号である。なお、この前後の冊子については現在のところ未見。本号には、若林史明の「花供養とその集冊」、著者名なしの「成田蒼虬」など、芭蕉堂に関連する歴史的論稿を含んでいる。また、四月一二日の花供養会開式の案内ちらしが挟みこまれていた。

個人蔵



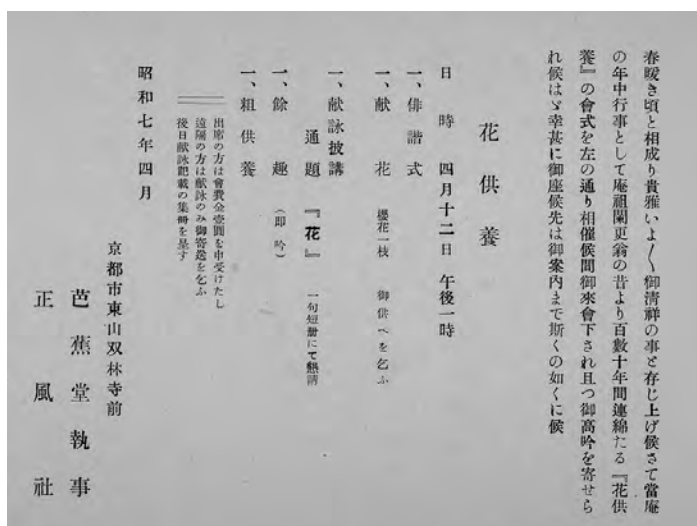
免状



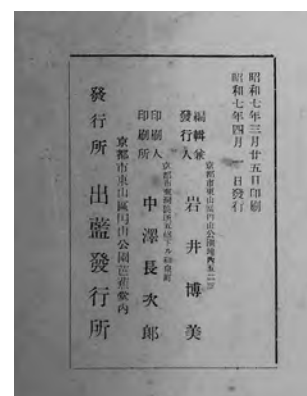
21「芭蕉堂門人録」より



雑誌表紙



ちらし



裏表紙（部分）

改訂『花供養』書誌

京都俳諧研究会

竹内千代子 赤間 亮

小林 孔 松本 節子

青木 亮人 岸本 悠子

立命館大学アート・リサーチセンター紀要「アート・リサーチ」10号より、
一部改訂して転載。

天明四年五月、高桑闌更は京都東山の双林寺門前に南無庵を設け、芭蕉堂をしつらえた。そして、同六年三月十二日に、桜木の芭蕉像に花をたむけ、俳諧を興行、花供養会を修した。この俳諧興行を巻頭にして、諸国からの奉納発句を集めて、『花供養』が刊行された。現在確認できる『花供養』は、天明六年から明治三年刊本までの五十四冊（但し、天保十四年刊本は上下二冊組みであるが一冊として扱う）である。

この『花供養』は、広く全国の俳人を収録し、天明・寛政・文化・天保以降明治初年までの八十年余りの俳壇を概観するに足るものとなっている。

以下、1 刊行年次、2 編者、3 体裁、4 刊記、5 構成の順で解説し、書誌一覧表を付す。

1 刊行年次

『花供養』刊行の時期は、天明六年から明治二年興行、明治三年刊までである。多くは、三月十二日の花供養会の連句・発句を集めて刊行した年刊句集で、刊行年次は、巻頭の端作り、および序跋年記により確定できる。寛政九年版と天

保十二年版とは年次を記さないが、次に示すように年次を判定した。

寛政九年版は、闌更が堂主の期間中であること、欠本は天明八年と寛政九年のみであるが、刊記に「芭蕉堂藏板」と明記するのは寛政八・十・十一年であることから、寛政九年版と判定した。また、天保十二年版については、九起が堂主を務めた期間中であること、天保十四年以降にある端作りがなく、それ以前の欠本が十二年のみであることから、天保十二年版と判定した。

次に、年刊句集の体裁に拠らない例がある。二年以上の俳諧興行をまとめて刊行するものである。

- 1 文化八・九年興行、同九年刊行（蒼虬主催）。
- 2 文化十一・十二・十三年興行、同十三年刊行（蒼虬主催）。
- 3 嘉永元年・二年興行、同二年刊行（九起主催）。

俳諧興行・書冊の刊行が確認できない年もある。

- 1 天明八年は、同年一月の大火による休刊と推察される（闌更主催）。
- 2 寛政十二年・文化五年・文化七年・文化十年・文化十四年・文政元年
～文政十年・文政十二年・天保二年の十七年間分（いずれも蒼虬主催）。
- 3 芭蕉堂堂主の交代期の天保六年から天保九年（蒼虬から朝陽へ）、
嘉永四年・嘉永五年（九起から公成へ）、明治元年（公成から良大へ）。
- 4 安政二年（公成主催）。

2 編者

『花供養』の編者は、堂主が務める花供養会の主催者である。編者は、次のとおりである。

高桑闌更（芭蕉堂一世） 天明六年・同七年・寛政元年～寛政十年

成田蒼虬（芭蕉堂二世） 寛政十一年・享和元年～文化四年・文化六年・

同九年・同十三年・文政十一年・天保元年・
同四年～同五年

築瀬千崖（芭蕉堂三世） 天保三年

北村朝陽（芭蕉堂四世） 天保十・十一年

北村九起（芭蕉堂五世） 天保十二年～嘉永三年

河村公成（芭蕉堂六世） 嘉永六年・安政元年・安政三年～慶応三年

内海良大（芭蕉堂七世） 明治三年

花供養会は、原則として堂主が主催するのであるが、蒼虬の堂主期間のうち、文化十二・十三年、天保三年は特別である。文化十二年は得終尼が主催している。また、文化十三年については、千崖も蒼虬とともに亭主（脇句）を務め、それぞれの俳諧興行二巻が収められている。通例では主催者の俳諧興行一巻のみ入集するが、不在がちな堂主蒼虬が留守を預る千崖を尊重した結果であろう。天保三年については、蒼虬が『花供養』の最後に発句のみ入集しているが、千崖が『花供養』の巻頭興行の亭主（脇句）を務めており、千崖の主催である。

3 体裁

『花供養』は、すべて半紙本の袋綴で刊行された。表紙の色および模様については年によって異なるが、これらについては『花供養』書誌一覧表に記さなかった。

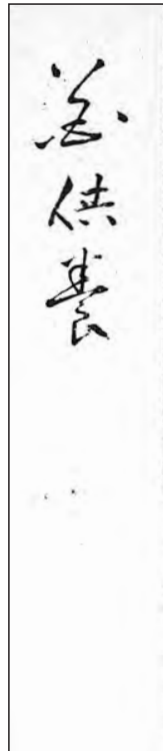
題簽には、題簽一覧図のように書体の異なる八種類（詳細には十種類）がある。闌更は、当初A・B・C・Dと年毎に題簽の書体を変えていたが、寛政三年から様式をEに変え、以後は継続した。蒼虬は、闌更の用いた題簽Eを継承するが、文政十一年からGに変更し、以後継続する。Gは、千崖・朝陽・九起・良大へと引き継がれた。ただし、得終尼が関わった文化十三年版のみはFになり、書肆もこの年のみは菊舎太兵衛（其篤）である。また、芭蕉百五十回忌の天保

〈題簽一覽〉（書誌一覽表凡例参照。以下同。）

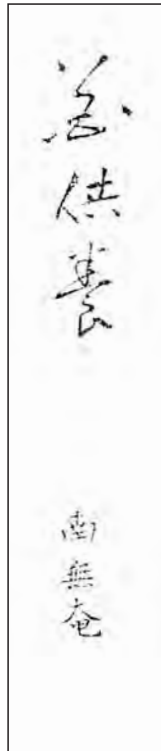
A 天明六年（白鹿）



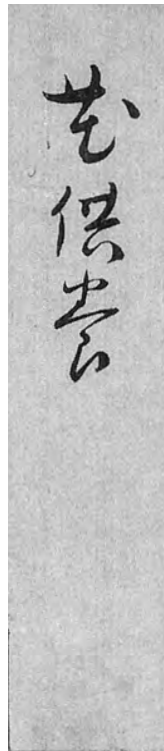
B 1 天明七年「花供養」（愛知県大）



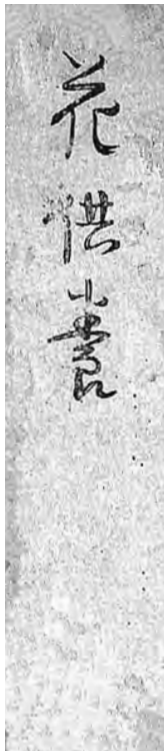
B 2 天明七年「花供養」（南無庵）（綿屋）



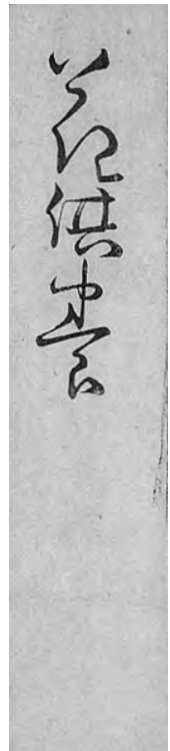
C 寛政元年（桜井）



D 寛政二年（月明）



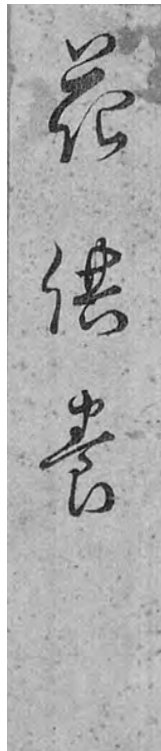
E 寛政三年以降 文化九年（石川歴博）



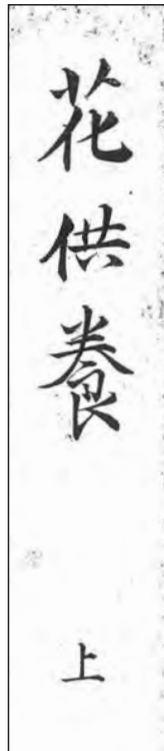
F 文化十三年（武蔵野）



G 文政十一年以降 天保四年（立教）



H 1 天保十四年（芭蕉百五十回忌）上（立教）



H 2 天保十四年（芭蕉百五十回忌）下（立教）



十四年版のみがHである。

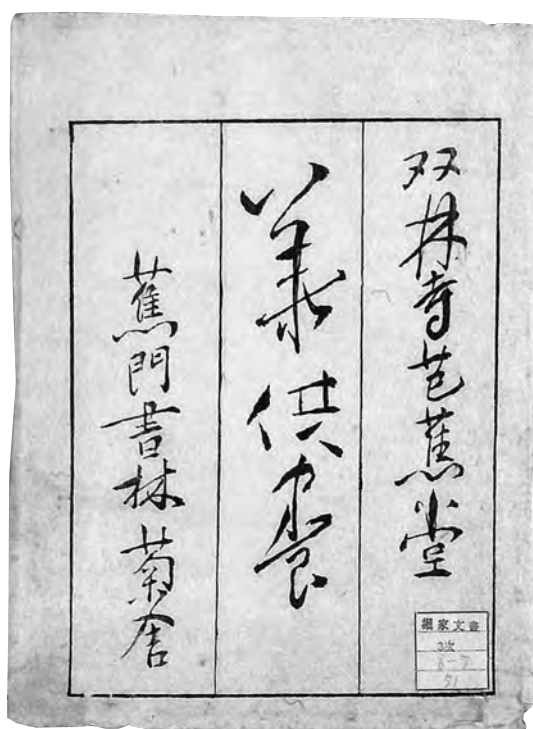
内題は、天明六年版に「丙午花供養」とあるのみである。

『花供養』の丁数は、寛政元年版の十丁が最も少なく、天保十四年版芭蕉百五十回忌の百九丁が最も大部である。天明六年から寛政三年までは二十丁前後の小冊である。寛政四年からの数年間は芭蕉百回忌（寛政五年）の影響から増加していき、さらに、天保期以後は六十丁前後へと増加する。

端作りは、寛政元年版「寛政元四年三月十二日於南無庵興行」と、天保十四年以降に「天保十五年甲辰三月十二日花供養会」などとなる。

袋は、①菊舎太兵衛（其成）版・②芭蕉堂版・③芭蕉百五十回忌版の三種類が知られる。『花供養』袋一覧を示す。

①「蕉門書林菊舎」版袋（寛政三年 堀家）



天明六年から寛政七年までは、書林菊舎（太兵衛）の出版であり、同期間中に使用されたものと推察される。

②「芭蕉堂」版袋（元治元年 小林）



③「芭蕉翁百五十回忌」版袋（天保十四年 月明）



寛政八年から芭蕉堂の蔵板となり、以後継続したものと推察される。なお、左肩に贈呈先の名前を記す付箋があり、一行目と二行目の間には熨斗がある。

4 刊記

『花供養』の出版に関わった版元等は、刊記によれば、蕉門俳諧書林 菊舎太兵衛（其成）、「芭蕉堂蔵板」、書林 桃林堂 勝田喜右衛門、芭蕉堂書林 橘栄堂 勝田善助、蕉門俳諧書林 菊舎太兵衛（其篤）、御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛、蕉門御摺物所 湖雲堂 近江屋利助がある。次に、単独の刊行や二軒の刊行などを区別せずに刊記を一覧する。

○ 蕉門俳諧書林 菊舎太兵衛（其成）――

天明六年・同七年・寛政元年～同七年

○ 「芭蕉堂蔵板」―― 寛政八年～同十一年

○ 書林 桃林堂 勝田喜右衛門―― 寛政十一年・享和元年～文化二年

○ 芭蕉堂書林 橘栄堂 勝田善助――

享和三年～文化四年・同六年・同九年

○ 蕉門俳諧書林 菊舎太兵衛（其篤）―― 文化十三年

○ 御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛――

天保元年・同三年～同五年・天保十年・同十一年・同十四年・弘化二年・同四年・嘉永三年

○ 蕉門御摺物所 湖雲堂 近江屋利助――

天保十三年・弘化元年・同三年・嘉永二年・同六年・安政元年・同五年・同六年

○ 未詳（無刊記）―― 文政十一年・天保十二年・安政三年・同四年・万延元年～慶応三年・明治三年

菊舎太兵衛（其成）は単独刊行。寛政八年に「芭蕉堂蔵板」となり、刊記に菊舎太兵衛（其成）の名が見えなくなる。寛政十一年、蒼虬に引き継がれると、書肆勝田喜右衛門を用い、さらに享和三年から同族と推察される書肆勝田善助が加わり、二書肆の協調関係が生じる。文化三年から同九年までは、勝田善助

の単独刊行となる。その後、文化十三年のみ菊舎太兵衛（其篤）が参入する。その後、天保元年からは摺物所の湖月堂菊屋平兵衛になる。これはさらに朝陽に引き継がれ、九起に代替わりした天保十三年からは、摺物所の湖雲堂近江屋利助が加わり、九起主催の書冊はこの二摺物所が交互に単独で担当するに至る。安政三年以降、公成に引き継がれてからは、無刊記となるが、安政五・六年のみ近江屋利助の名が見える。以上のように花供養会の主催者によつて書林・摺物所が変わり、なかでも蒼虬時代の変更に最も大きい。

なお、安政四・五年にのみ「池田要人書」の奥書がある。

5 構成

『花供養』の構成は概ね、序文・巻頭俳諧興行・諸国奉納発句および連句・巻頭俳諧興行連中の発句・跋文・刊記からなる。巻頭俳諧興行・諸国奉納発句・巻頭俳諧興行連中の発句の構成は、義仲寺『しぐれ会』に倣うもので、闌更が『しぐれ会』の影響を受けたものである。蒼虬以降の堂主は様々に工夫し発展させ大部な書冊としていくが、基本の巻頭俳諧興行・諸国奉納発句の構成は崩していない。『花供養』には序文を入れることを原則とし、跋文は無いことが多い。『花供養』の序文の多くは、地方の俳諧作者の執筆である。

句の内容については、芭蕉追善の性格を持つが、「花供養」と言いながら花の句に限定する傾向が次第に弱くなり、花の句以外の春や四季折々の句が散見される。

『花供養』の入集地域を概観すると、京・大坂、その周辺の近江・播磨・丹波が多く、すべての書冊に共通している。それらの地域に次いで、山陽道・西海道・南海道・北陸道も多い。また、山陰道・東海道・東山道・蝦夷・函館・沓岐・対馬・朝鮮国からの入集も確認される。このように『花供養』の入集状況は、およそ全国を網羅していると言える。

改訂『花供養』書誌一覧表

凡例

- 一 本表は、『花供養』の書誌一覧である。
- 一 本表は、使用の便を考慮して通し番号を付した。なお、○印は、現時点では版本の有無が確認できない年である。
- 一 ※印は、題簽に「花供養」とあるものである。A以下のアルファベットは、『花供養』(題簽一覽)(30頁)に付した記号である。
- 一 丁数は、底本とした裏表紙見返しに刊記がある場合は一丁として数えた。遊紙のある書冊はない。
- 一 底本等の略記は、以下のとおりである。

愛知県大 愛知県立大学附属図書館蔵本
石川歴博 石川県立歴史博物館蔵本
糸井 京都府舞鶴市郷土資料館糸井文庫蔵本
柿衛 柿衛文庫蔵本
月明 石川県立図書館月明文庫蔵本
小林 小林孔蔵本

- 一 櫻井 立命館大学アート・リサーチセンター桜井武次郎旧蔵本
- 一 三康 三康図書館蔵本
- 一 竹内 竹内千代子蔵本
- 一 竹冷 東京大学附属図書館竹冷文庫蔵本
- 一 白鹿 兵庫県西宮市笹部桜コレクション―白鹿記念酒造博物館寄託―蔵本
- 一 弘前 弘前市立弘前図書館石見文庫蔵本
- 一 堀家 京都府城陽市立歴史民俗資料館堀家マイクロ資料(堀家蔵本)
- 一 武蔵野 武蔵野大学附属図書館前田利治旧蔵本
- 一 綿屋 天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵本
- 一 立教 立教大学附属図書館蔵本
- 一 袋の現存するものは、備考欄に『花供養』袋一覽(31頁)の番号を記した。
- 一 備考欄には、袋の残存状況の他、芭蕉堂堂主の動向・翻刻資料の参考となるものなどを記した。
- 一 通し番号の○印は「花供養と“京都の芭蕉”」展に出展したものである。

【付記】

本研究会では、『花供養』全作品の翻刻作業を継続して行っており、その一部は、二〇一〇年十一月一日から、アート・リサーチセンターのWebサイト上で公開している。

通し 番号	年次	表紙	外題内題端作り	編者	序文	巻頭発句脇	跋文 *奥付	刊記	丁数	底本	備考
③	天明八年	薄茶色・無地	※C 寛政元西年三月十二日於南無庵興行(端)	闌更	なし	蘆涯 闌更	なし	蕉門書林 菊舎太兵衛 京三条御幸町西エ入ル	10	櫻井	本文追加有り。
4	寛政二年	薄茶色小 (菊空押模様)	※D	闌更	寛政二戌とし(無署名)	羅水 闌更	なし *寛政 庚戌年春二月	蕉門書林 菊舎太兵衛 京三条通御幸町西	25	愛知 県大	諸本追加異同有り。
①	天明六年	薄青色・無地	※A 丙午花供養(内)	闌更	なし	闌更 渭川	なし	蕉門書林 菊舎太兵衛 京三条通御幸町西エ入丁	14	糸井	
2	天明七年	薄青色無地(綿屋)	※B1 ※B2	闌更	天明丁未春 芭蕉堂社中	闌更 略	なし	蕉門書林 菊舎太兵衛 京三条通御幸町西エ入町	16	愛知県大 (題簽B 2綿屋)	

②②	○	21	○	20	①⑨	18	17	16	15	①④	○	13	12	①①	10	9	⑧	7	⑥	⑤
文化八年 文化九年	文化七年	文化六年	文化五年	文化四年	文化三年	文化二年	文化元年	享和三年	享和二年	享和元年	寛政十二年	寛政十一年	寛政十年	寛政九年	寛政八年	寛政七年	寛政六年	寛政五年	寛政四年	寛政三年
茶色・無地		薄茶色・小 菊空押模様		茶色・小菊 空押模様	茶色・小菊 空押模様	魚茶色・小 菊空押模様	薄茶色・布目 模様の縮屋	薄茶色・布目 模様の縮屋	薄茶色・小 菊空押模様 (柿衛)	薄茶色・小 菊空押模様		茶色・小菊 空押模様 (頼原)	茶色・小菊 空押模様	薄茶色・小 菊空押模様	茶色・小菊 空押模様 (武蔵)	薄茶色・小 菊空押模様	薄茶色・小 菊空押模様	薄茶色・小 菊空押模様 (武蔵)	薄茶色・小 菊空押模様	薄茶色・小 菊空押模様
※E		※E		※E	※E	※E	※E	※E (推定)	※E	※E		※E	※E	※E	※E	※E	※E	※E	※E	※E
蒼虬	蒼虬	蒼虬		蒼虬	蒼虬	蒼虬	蒼虬	蒼虬	蒼虬	蒼虬		蒼虬	闌更	闌更	闌更	闌更	闌更	闌更	闌更	闌更
文化壬申六月 芙九	文化むつの春三月 鳩の屋文常			文化四卯春三月 伯陽応響舎沾雪	文化三年とらの弥生 志字	文化二乙丑のとし姑洗中の 湖西白鷗居千賀雄	文化紀元甲子春 執古堂葦笠	享和三のとしやよひなかば西 湖素人	享和二年壬戌春 なにはの米彦	可董		寛政未の春 瑞馬	寛政十年三月 能浦黒島獅子窟玻井	伏水 あし丸	寛政丙辰弥生十二日 加賀蒼虬	寛政乙卯三月 平安 大来堂白池	寛政むつとらのとし 竹堂主人	寛政五年春 四山亭蟠水	寛政よつとのとし 山亭	寛政亥の年弥生中の二日可 能
蕪巾 蒼虬	素人 蒼虬			怨裕 蒼虬	阿年 蒼虬	乙都留 蒼 虬	武陵 蒼虬	葦笠 蒼虬	岱季 蒼虬	百池 蒼虬		蒼虬 鹿古	蜃洲 闌更	百池 闌更	兎仙 闌更	蜃洲 闌更	斗流 闌更	蟠水 闌更	山亭 闌更	清秋 闌更
文化九年壬申 篤老	大無			なし	なし	なし	なし	なし	田禾	享和元年春 友国		なし	なし	なし	なし	日野の淇竹	*寛政六甲寅三月	なし	なし	*寛政三辛亥三月 蘆涯
芭蕉堂書林 勝田善助 烏丸下立売上ル町	芭蕉堂書林 勝田善助 烏丸下立売上ル町			芭蕉堂書林 勝田善助 京都烏丸下立売上	書林 橘栄堂 勝田善助 京都烏丸下立売上	京都書林 勝田喜右衛門 御幸町錦小路上ル町 勝田善助 烏丸通下立売上ル町	京都書林 桃林堂 勝田喜右衛門 御幸町錦小路上 橘栄堂 勝田善助 烏丸下立売上	京都書林 勝田喜右衛門 御幸町錦小路上ル町 勝田善助 烏丸通下立売上ル町	書林 勝田喜右衛門 京御幸町錦小路上ル	書林 勝田喜右衛門 京御幸町錦小路上ル		洛東 芭蕉堂蔵板 勝田喜右衛門 京四条通河原町西へ入丁	芭蕉堂蔵板	洛東 芭蕉堂蔵板	洛東 芭蕉堂蔵板	蕉門書林 菊舎太兵衛 京三条通寺町西	蕉門俳諧書林 菊舎太兵衛 京三条通寺町西入	御俳諧書林 菊舎太兵衛 京三条通寺町西	蕉門書林 菊舎太兵衛 京三条通寺町西エ入丁	蕉門書林 菊舎太兵衛 京三条通寺町西入丁
47	37	46	48	36	25	24	30	28	33	40	42	67	49	45	49	40	26			
糸井	石川 歴博			月明	糸井	月明	綿屋	弘前	弘前	櫻井		白鹿	月明	小林	白鹿	白鹿	小林	白鹿	月明	月明
												没。 闌更 寛政十年五月三日				一茶全集に翻刻掲載	堀家本袋①	諸本追加異同有り。 堀家本袋①		堀家本袋①

○	29	30	31	32	33	34	35	36	○	28	27	26	○	25	○	24	○	23	○
天保十年	天保十一年	天保十二年	天保十三年	天保十四年	天保十五年	弘化元年	弘化二年	弘化三年	天保六年・同九年	天保五年	天保四年	天保三年	天保二年	天保元年	文政十二年	文政十一年	文化十四年・文政元年・同十年	文化十三年	文化十一年
薄青色・無地(武蔵)	薄青色・無地	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊	薄茶色・小菊
※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※G	※F	※F
朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽	朝陽
天保十亥年三月太室	備陽 一亭改志郎	山陰 九華	天保壬寅春 西湖山川楚焦	能登正院 春藤鳳兮 備岡山 半化室孤山 古備等岡 塚本淡亭 播陽 水音室霞村 防州宝積 帰岫庵閑雲 大村藩 金谷福田賢	保辰晩春 湖南信楽鷺洲 天保十五甲辰春 越那古 松清室子邁	伯耆 田中乙美	丙午春 加州我柳	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室	天保十亥年三月太室
志可寿 朝陽	香雪 朝陽	赤鱗 九起	鷺洲 九起	翁 九起	鳳兮 九起	和鳴 九起	竹月 九起	志可寿 朝陽	香雪 朝陽	赤鱗 九起	鷺洲 九起	翁 九起	鳳兮 九起	和鳴 九起	竹月 九起	志可寿 朝陽	香雪 朝陽	赤鱗 九起	鷺洲 九起
なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町	御摺物所 湖月堂 菊屋平兵衛 京東洞院通仏光寺上ル町
72	74	60	109	73	61	51	39	72	74	60	109	73	61	51	39	72	74	60	109
白鹿	立教	櫻井	糸井	立教	白鹿	立教	白鹿	白鹿	立教	櫻井	糸井	立教	白鹿	立教	白鹿	立教	白鹿	立教	白鹿
立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。	立教・袋② 白鹿・49丁。

④9	④8	47	④6	45	④4	43	④2	○	④1	40	○	39	38	③7
文久三年	文久二年	文久元年	万延元年	安政六年	安政五年	安政四年	安政三年	安政二年	安政元年	嘉永六年	嘉永四年・嘉永五年	嘉永三年	嘉永二年 嘉永元年	弘化四年
薄茶色・刷 毛目模様	鼠色・桜 空押模様	薄青色・桜 空押模様	薄茶色・ 毛目模様	薄茶色・ 布目地刷	鼠色・桜 空押模様	薄青色・ 小菊空 押模様	青色・布 目地模様 (櫻井)		薄茶色・ 小菊空 押模様	紺色・魚 甲繫ぎ空 押模様		紺色・小菊 空押模様	紺色・小菊 空押模様	藍色・小菊 空押模様
※G 文久三年癸亥三月 十二日花供養会(端)	※G 文久二年壬戌三月 十二日花供養会(端)	※G 文久元年辛酉三月 十二日花供養会(端)	※G 安政七年庚申三月 十二日花供養会(端)	※G 安政六年己未三月 十二日花供養会(端)	※G 安政五年戊午三月 十二日花供養会(端)	※G 安政四年丁巳三月 十二日花供養会(端)	※G 安政三年丙辰三月 十二日花供養会(端)		※G 嘉永七年甲寅三月 十二日花供養会(端)	※G 嘉永六年癸丑三月 十二日花供養会(端)		※G 嘉永三庚戌三月十二 日花供養俳諧(端)	※G 嘉永元年戊申三月十二 日花供養俳諧(端)	※G 弘化四歲丁未三月十二 日花供養俳諧(端)
公成	公成	公成	公成	公成	公成	公成	公成		公成	公成		九起	九起	九起
与謝人 梅溪様田氏	福原 籥卜三秋庵	客雲山人石友	庚申晩春 周防玉柳の浜口 畔玉堂登水	安政己未春 司水	時政午春 平安何羨	安政四年暮春 篠山 門生土常薫浴	安政三年丙辰晩春 大隅 太素		嘉永七年寅三月 芳麗 可樵	嘉永むつ丑の弥生 播磨 朗霞古谷		肥後 雪茶	平安 丘花園	城南 時少翁老波
山士 公成	鶴巢 公成	黍丘 公成	謝風 公成	竹仙 公成	如九 公成	梅城 公成	梅甘 公成		北梅 公成	可樵 公成		醉茶 九起	千千 九起	子邁 九起
なし	なし	なし	なし	なし	なし *池田要人書	なし *故東籬亭三男池田 要人書	なし		なし	なし		なし	なし	なし
無刊記	無刊記	無刊記	無刊記	蕉門御摺物所 京四条寺町東へ入御旅町 湖雲堂 近江屋利助	蕉門御摺物所 京四条寺町東へ入御旅町 湖雲堂 近江屋利助	無刊記	無刊記		御集冊すり物師 湖雲堂 近江屋利助 皇都四条通寺町東へ入南側	御すり物師 近江屋利助 京四条寺町東へ入		御摺物細工所 菊屋平兵衛 京東洞院仏光寺上ル	御すり物師 近江屋利助 京四条寺町東へ入	御摺物細工所 菊屋平兵衛 京東洞院仏光寺上ル
43	44	48	61	62	54	55	61		59	63		40	69	68
糸井	櫻井	月明	櫻井	月明	月明	三康	白鹿		月明	小林		立教	白鹿	小林
三康本袋②	綿屋本袋②・別紙公成の 挨拶文付。 若葉会興行有り。						諸本追加異同有り		表紙・刊記に異同有り。 立教大・三康本袋②	立教大本袋②		立教大本袋②	立教大本袋②	

○	明治元年	○	明治元年	○	明治元年	○	明治元年	○	明治元年
54	明治二年興行・明治三年序	53	慶応三年	52	慶応二年	51	慶応元年	50	元治元年
青色・桜散し空押模様	※G 明治二年己巳弥生十二日花供養会(端)	良大	明治庚午春 岡盟叟梅裡／ 松が崎の松葉搔 素兄	翁 良大	なし	無刊記	45	櫻井	紅葉供養あり。 『花洛名勝宛句集』広告付。別紙花供養募句ちらし付。
薄茶色・桜散し空押模様	※G 慶応三年丁卯三月十二日花供養会(端)	公成	慶応三年丁卯春月 江戸龍尾園 香城／ 平安眼医仙心	香城 公成	なし	無刊記	51	櫻井	別紙公成の挨拶文付
薄茶色・桜散し空押模様	※G 慶応二年丙寅三月十二日(端)	公成	慶応二丙寅年季春 皇都 喜寿翁浮藤生眼一乗	錦水 公成	なし	無刊記	41	白鹿	
薄茶色・桜散し空押模様	※G 元治二年乙丑三月十二日(端)	公成	丑の弥生 素知園春松	松声 公成	なし	無刊記	44	櫻井	若葉会興行有り。
紺色・桜空押模様	※G 元治元年甲子三月十二日(端)	公成	元治元年弥生なかば 素酔	宇甲 公成	なし	無刊記	38	小林	小林本袋② 若葉会興行有り。

〔参考文献〕

櫻井武次郎「花供養」(大阪俳文学研究会「会報」三十八号・平成十六年)

〔付記〕

調査にあたり、各図書館・文庫のお世話になりました。記して感謝申し上げます。

備考
明治15年3月 九起没
明治25年9月14日 良大没

『花供養』の書肆

24	⑥	菊舎太兵衛刊 城南寺田社中再校 『楞良発句集』	半紙本二冊。寛政4年再刻。	堀家文書
25	⑥	勝田喜右衛門刊 暮柳舎車大編 『としのうち』	半紙本一冊。文化1年3月序。	糸井文庫
26	⑥	勝田善助刊 真鍋叡美編 『さざなみ集』	半紙本一冊。文化11年夏奥。	個人蔵
27	⑥	菊屋平兵衛刊 荒木万籟編 『逐々集』等	半紙本一冊。天保5年刊。	糸井文庫
28	⑥	近江屋利助刊 北村杜鶯編 『類題年毎集』等	半紙本一冊。弘化1年刊。	糸井文庫

歴代芭蕉堂堂主の俳諧活動

29	⑦	『花供養』俳人分布図と各年の『花供養』	I 寛政6年關更主催・II 文化3年蒼虬主催・III 弘化3年九起主催・IV 安政5年公成主催。	糸井文庫、個人蔵
30	⑦	高桑關更「さみだれや」短冊	「さみだれや鼠のめぐるふるつゝら 關更」	個人蔵
31	⑦	成田蒼虬「秋の夜の」短冊	「秋の夜のあはれにまけてねたりけり 蒼虬」	櫻井文庫
32	⑦	畑吟風宛成田蒼虬書簡と天保四年 『花供養』	11月21日付書簡一通、縦16.6cm×横24.5cm。半紙本一冊、天保4年序。	畑家文書・糸井文庫
33	⑦	梁瀬千崖「中々に」短冊	「賀初老 中々に花は老木のさくら哉 千崖」	個人蔵
34	⑦	河村公成編『芭蕉堂三代発句集』	小本二冊。安政6年11月刊。	櫻井文庫
35	⑦	芭蕉堂朝陽撰「月並諸国発句抜章」	横本一冊。縦17.0cm×横24.0cm。36丁。三月の月並。	畑家文書
36	⑦	北村九起「飽はて、」短冊	「飽はて、蛙も鳴ず五月雨 九起」	個人蔵
37	⑦	「丹後俳人の摺物注文書翰貼込帖」	①天保4年募句ちらし一枚、縦16.6cm×横11.9cm。②天保14年芭蕉150回忌募句ちらし一枚、縦14.3cm×横10.7cm。	糸井文庫
38	⑦	河村公成「はじめから」短冊	「はじめから老て啼くか閑古鳥 公成」	個人蔵
39	⑦	「芭蕉堂発句留」と嘉永6年『花供養』	半紙本、写本一冊、嘉永5年11月筆。半紙本一冊、嘉永6年端作り。	個人蔵
40	⑦	内海良大「人かげの」短冊	「聖廟 人かげの添はぬ日はなし梅の花 良大」	個人蔵
41	⑦	岩井藍水「暖き」短冊	「暖き日を吸ふ野辺やこゝろよき 芭蕉堂 藍水」	個人蔵
42	⑦	芭蕉堂立机允可状	一巻。本紙縦19.3cm×横52.4cm。昭和30年3月10日付。	個人蔵
43	⑦	岩井博美編「出藍」第2号	一冊。昭和7年4月1日発行。	個人蔵

※1 関西大学附属図書館

※2 舞鶴市郷土資料館糸井文庫

※3 立命館大学アート・リサーチセンター櫻井文庫

※4 立命館大学附属図書館西園寺文庫

※5 城陽市 常光庵(芭蕉堂)

花供養と“京都の芭蕉” 展示資料一覧

No	ケース	展示資料	巻冊数・法量・成立年次等	所蔵
----	-----	------	--------------	----

東山芭蕉堂関係文書

1	①	双林寺境内芭蕉堂関係文書	卷子一巻。天明3・7年、明治6・8年の文書四点の合装。縦31.8cm×横127.0cm。	関西大学蔵※1
---	---	--------------	--	---------

洛中の俳諧師たち

2	②	千載堂文士編『こまごらえ』	横本一冊。縦14.5cm×横21.0cm。77丁。寛政7年序。	糸井文庫※2
3	②	西村定雅「山にみちて」短冊	「山にみちて野に落来るや夕霞 定雅」	個人蔵
4	②	寺村百池「西と見えて」短冊	「西と見えて日は入にけり春の海 百池」	個人蔵
5	②	柏原瓦全編『さくら会』	文化4刊、半紙本一冊。文化8年刊、半紙本一冊。	個人蔵
6	②	二条家俳諧摺物	二枚一組。各紙、縦36.0cm×横47.8cm。文政9年4月25日興行。	個人蔵

京都の“芭蕉さん”

7	③	京都の芭蕉庵（金福寺）・芭蕉堂（東山）・芭蕉塚（句碑）の分布地図		
8	③	畑吟風宛富原支雪書簡	一通。縦16.5cm×横105.8cm。1月26日。	畑家文書
9	③	堀赤水「松は松」短冊	「上池楼の芭蕉像みの虫庵に遷座 松は松又涼しかる竹の月 赤水」。	畑家文書
10	③	義仲寺編『諸国翁墳記』	半紙本一冊、13丁。半紙本一冊、57丁。	櫻井文庫※3
11	③	丹後宮津連編『一声塚』	半紙本一冊。30丁。明和4年10月12日序。	糸井文庫
12	③	逸見木越編『烏塚百回忌』	半紙本一冊。18丁。寛政5年10月5日興行。	糸井文庫
13	③	中野石外編『嵐山集』	半紙本一冊。本文23丁。嘉永2年春刊。	櫻井文庫
14	③	『京みやげ 東山之部』	中本一冊。25丁。著者未詳。慶応2年序。	櫻井文庫

東山芭蕉堂の建立と展開

15	④	『都名所図会』『拾遺都名所図会』	大本十冊。『都名所図会』六巻は、安永9年刊。『拾遺都名所図会』四巻は、天明7年刊。	アートリサーチセンター蔵※4
16	④	高桑闌更編『奉納其三集』	半紙本一冊。寛政5年刊。「双林寺芭蕉堂記」（龍公美）を掲載。	堀家文書
17	④	堀泰夫著「はたを草」	写本十冊。安永4年から寛政9年までの句日記。	堀家文書
18	④	芭蕉堂の変遷	①天明7年の『拾遺都名所図会』・②文久2年の『花洛名勝図会』・③昭和18年の出口対石画・④昭和33年の竹村俊則画・⑤平成6年の図録「芭蕉と近江の門人たち」所収写真・⑥現在。	
19	④	森川許六刀芭蕉木像・河合見風筆箱書	木像一体。丈22.0cm×幅18.5cm。	常光庵蔵※5
20	④	五仲庵澤有節所持芭蕉木像・笈	木像一体。丈22.3cm×幅23.3cm。笈一背。	常光庵蔵
21	④	「芭蕉堂門人録」	一冊。縦25.2cm×横18.3cm。箱入り。大正12年3月再録、以降平成1年12月6日まで続補。	常光庵蔵
22	④	木村明啓・川喜多真彦撰 『再撰花洛名勝図会 東山之部』	大本一冊。文久2年刊。	西園寺文庫

書冊『花供養』

23	⑤	口絵Ⅱ「展示『花供養』一覧」参照		
----	---	------------------	--	--

協力者（敬称略）

赤間 亮

石上 阿希

石村乃緒子

岸本 悠子

叢 健太

黒田 徹

小林 孔

櫻井 町子

竹内千代子

西川 良和

畑 忠良

服部 憲治

花谷 道恵

堀 淳子

前崎 信也

松本 節子

三浦 優子

城陽市 常光庵（芭蕉堂）

関西大学図書館

城陽市歴史民俗資料館

長岡京市教育委員会

舞鶴市教育委員会

舞鶴市郷土資料館

山口県立山口図書館

立命館大学アート・リサーチセンター

立命館大学図書館

芭蕉堂主園更先生之像



金水東山敬亮筆

か
李下畫
田

像肖翁田成乳蒼



敬亮堂
田

竹梁千産翁像
敬亮堂
田



像肖翁成公



敬亮堂
田

